魔法少女リリカルなのは 十の剣を持つ者

フォグナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　十の剣を持つ者

【Ｎコード】
Ｎ４００３Ｗ

【作者名】
フォグナス

【あらすじ】
新暦６５年。
第９７管理外世界「地球」の海鳴市に住む小学３年生の金木（かなぎ）　灯火（とうか）。
赤と緑のオッドアイを持ちながら、それをひた隠しにし、平凡に暮らしていた少年は、魔法に出会い、やがて様々な事件に関わることになる。
リリカルなのはの非転生オリ主の二次創作小説です。

はじめてこういった小説を書くので、どうにもおかしいだろと言うところはあるかもしれませんが、生暖かい眼差しで見守っていてください。

それは、始まりの言葉（前書き）

プロローグなので、かなり短いです。

それは、始まりの言葉

新暦６５年。
とある管理外世界に、２１の災いが落ちた。
その災いは、やがてある少年少女達に大いなる出会いをもたらす、ＰＴ事件（プレシア・テスタロッサ事件）と呼ばれる事件を引き起こした。
これは、その事件の記録であり、それから後に続く数々の事件の記録でもある。

それは、小さな出会いだった。
その出会いは、やがてさらに大きな出会いをもたらし、その出会いは、やがてもっと大きな出会いをもたらす。
その中で、譲れない思いをぶつけ合い、分かり合っていく少年少女。
友達を、悲しい瞳をした少女を救いたい少女。
母の為に戦う少女。
そして、今を守る為に剣をとった少年。
やがて彼らは、必然という奇跡を起こす。
魔法少女リリカルなのは　十の剣を持つ者、始まります。

それは、始まりの言葉（後書き）

先行きはかなり不安ですが、これから頑張っていこうと思います。

なにか指摘などがあったらどんどん感想に書き込んでください。

第97管理外世界／金木　灯火

そこは、不思議な場所だった。
空はまるで血で染めたかのような輝きを放っており、生い茂る草木は不気味にざわめいている。そして何より、そこはとても静かだった。まるで、そこだけが世界から切り取られてしまったかのような錯覚に陥るほどに。

ザザッ

しかし、その静かな世界に、何かが草木を掻き分けるような音が響いた。明らかに風により引き起こされた音でなく、がさがさと、人為的に発生させられた音。やがてその音は、大きく断続的な物となり、そして一際大きな音が発せられたとき。草むらを掻き分け、それは現れた。

一言で言えば、それは巨大な毛玉と呼べる物だった。しかし、その毛玉には爛々と赤く光る目があり、先程から低く唸っている事から、それがただの物質ではなく、れっきとした生物であることを示している。

その生物は、まるで野性動物がするかのように、周囲を警戒しているのか、あちこちに視線を向けている。やがて、周囲に危険はないと判断したのか、視線をあちこちに向ける事を止め、その場から移動しようと正面を向いた瞬間、

緑の光を放つ鎖にその身を拘束されていた。

「ようやく捕まえた！」

拘束されている。生物を追ってきたのか、草むらから一人の少年が飛び出してきた。
まるで外国の民族衣装のような服で身を包んだ、まだ幼い少年。ハニーブロンドの髪に、年齢故かまだまだ頼りない体躯から、一見すると少女に見えなくもない、そんな少年だった。

「動きが止まってる内に封印しないと……」

少年はそう呟くと、首にかけていた赤く丸い宝石がついたネックレスを首から外し、右手に持つ。
そして、その右手を拘束されている生物に向かって突き出すように翳す。

すると、開いた右手の先にネックレスが浮かび、少年の足下に四角と丸を組み合わせた模様が浮かび上がる。その模様は、鎖と同じ色の光を放っており、じょじょにその光は強くなっていく。

「封印すべきは忌まわしき器！ジュエルシード、シリアルＸＸＩ、ふうい……っ！？」

そして、少年が呪文を唱えようとしたとき、拘束されていた生物が、身を縛る鎖を引きちぎり、少年に向かって突進を敢行した。

「くっ！ラウンドシールド！！」

少年が掛け声と共に、翳した左手の先に、先程足下に浮かんだ物と同じ模様が浮かび上がる。
その模様は、盾の如く生物の突進とぶつかり合い、生物を押し留めている。

「くっ……うぅ……！」

苦しげなうめき声をあげ、押しきられまいとするが、じょじょに後ろへと押しやられていく。やがて、盾にヒビが入り、それが広がっていく。

そして、ヒビが全体に広がった瞬間、盾は粉々に割れた。

「あ……うわぁ！！」

あの盾がいかなる強度を持っていたかは定かではないが、かなりな物であることは確かだ。その盾を粉々にするほど、力を込めていた生物は、盾が無くなったことで少年に突進のインパクトを伝えることに成功した。

幾分か弱まっていたかもしれないが、当然、幼い少年の体を吹き飛ばす位の威力は秘めていた。

結果、少年は背後にあった樹木に勢いよく叩きつけられることになった。

少年が動けない様を見て、生物は、今度こそその場から移動した。

「くそ……早く追わないと……」

少年はすぐさま追いかけようと立ち上がったが、すぐに倒れ込んでしまう。

それから何度か立ち上がろうとしていたが、ついぞ立ち上がることは出来なかった。

「だめだ……意識が……」やがて、少年は意識を失った。直前に、助けを求める思念を飛ばして。

そして、少年の体が光に包まれ……

「……何だ、この夢……」
そこで目が覚めた。
時計を見ると、時刻はまだ午前４時。自分が起きるにはまだまだ早い時間だった。

「変な夢のせいで変な時間に目が覚めちまった……」
一瞬二度寝してしまおうかとも思ったが、そうしたら確実に寝過ごすだろう事は目に見えている。

俺はバス通学だから、寝過ごすだろう＝遅刻ということになる。それは良くない。
今まで、皆勤賞の常連だったのだ。今さら常連をやめる気はない。
それに、遅刻なんてしたら、身を粉にして働き、お高い学費を払ってくれてる姉に申し訳がたたない。

「……うん、起きよう」
んでもって、たまには姉に感謝の気持ちを込めて、朝食の一つでも作ろうか。

幸い、へんてこな夢のおかげで眠気は欠片もない。
途中で寝落ち、なんてヘマは無いだろう。

「さて……やりますか！」

そうと決まれば、気合いを入れて布団をどける。グッバイ温もり
手早く着替えを用意し、軽くシャワーを浴びてから朝食作りに取りかかる。

姉さん、喜んでくれるだろうか？
朝食の用意をしながら、そんなとりとめの無いことを考える。つい

でに、頭の隅では今朝がたの夢の事を考えていた。
まだ春と言えど、多少の寒さは残っている。
そんな中、俺はバス停で、スクールバスが来るのを待っていた。

俺が通っている聖祥大附属小学校は、言ってしまえばなかなか裕福な家の子が通うという学校だ。
実際はどうか知らないが、俺のクラスメイトにはそこそこ裕福な奴が多く、その中のある二人なんか格別な金持ちだ。
だから俺の脳内では、聖祥＝裕福層の学校と言う公式が成り立っている。

などと考えている内に、どうやらバスが来たようだ。
目の前に止まったバスに乗り込み、バスの前の方にある席に座ろうとして……

「こらぁぁ！なぁに前の方に座ろうとしてるのよ！！」最後列から飛んできた声に、結局俺はいつもの席に座る事となった。

「……バニングス、大声を出すなよ……迷惑だろうが」
「始めっからこっちに来ない灯火が悪いのよ！さぁ、さっさと座りなさい！」
「朝から元気な奴だな、お前は」

やけに耳に残る声を、ある程度聞き流しながら、俺はいつもの席――最後列の一つ前の席、正面向って右側――に座る。
今日も、ささやかな抵抗は無意味だったようだ。今さらだが、先ほど言われた「灯火」と言うのは、俺の名前だ。
金木灯火（かなぎとうか）、それが俺の名前。

で、先程から騒いでいる、俺がバニングスと呼んだ奴がアリサ・バ

ニングス。
さっき言った、格別な金持ち二人の内の一人だ。名前で察したと思うが、外国人だ。
もっとも、日本語があまりに流暢なので、外国人を相手にしている感覚はないが。

ちなみに、たぶんツンデレ、きっとツンデレ。
大事な事だから二回言ってみた。

「アリサちゃん、落ち着いて。おはよう、灯火君」
「おう、おはようさん、月村」

今話し掛けてきたのが格別な金持ちその二、月村すずかだ。

バニングスとは正反対に、非常におとなしく、バニングスが外国のエネルギッシュな美少女だとすれば、月村は日本の大和撫子と言ったところかな？
性格が正反対で、一見すると馬が合うとは思えないが、むしろその正反対さが仲良しの秘訣か？

そしてあと一人が……

「あ、えと、お、おはよう、灯火君」
「おう、おはよう、高町……どうした？顔赤いな、風邪か？」
「ふぇ！？ううん、何でもないよ！なのは、すごく元気だよ！」
「……なら良いけど」

この挙動不審なのが高町なのは。
いつも俺と話す時は、こんな風だ。

高町は海鳴で人気な喫茶店の娘なんだが、いずれ店を継ぐのに、男を相手にするとこんな挙動不審で良いのだろうか？

そして、この４人と言ういつものメンツで、主にバニングスと一緒に高町を弄りながら学校へ向かう。

それが俺の日常だ。

第９７管理外世界／金木　灯火（後書き）

１話あたりの適切な文字数がわからない！

今回はちょっと長すぎかも知れません。

そのくせ、まだ魔法のまの字にすら触れてない……

これでいいのだろうか

自分の事、将来の事

「この世の中には、いろんな仕事があります。それらのおかげで、私たちは暮らしていけるんですね」

先生が黒板に文字を書く音が、静かな教室にやけに大きく響き渡る。

書いてある内容は仕事について。

そして、最後に、こんな文を書いて、先生はこちらに向き直った。

『将来の夢について』

恐らく、教卓にのっかってる原稿用紙が今から配布され、それに将来の夢を書けと言うことなのだろう。

はっきり言おう、こう言う類いの物は苦手だ。

べつに小三に明確な未来のヴィジョンを求めているわけではなく、あくまで「何々になりたい」程度でいいんだろう。

けど、どうせ自分の事だから、手は抜きたくない。

もっとも、俺が隠してるある身体的特徴を一生隠し通せるのか？という疑問というか、不安もあるわけで、それのせいで普通の職業につけるのかと言うこともあるが。

そうこう考えている内に、時間は刻一刻と過ぎていく。

結局、俺は原稿用紙に一文字すら、それこそ名前すら書くことが出来なかった。

当然先生に怒られた。
次からは真面目に考えましょうってな。
うーん、真面目に考えてた結果が、この汚れ一つない原稿用紙なんだけどなぁ……

ちなみに、俺の隣には高町も立っていて、一緒に怒られていたと言うことを、ついでに言っておく。

罪状は名前しか書いてなかったからだそうだ。

……うん、少なくとも俺よりはだいぶマシだ、高町よ。

「それはあんたらが馬鹿なのよ、自業自得ね」

昼休み、かのバニングス氏に怒られた事を、原因を含めて説明した結果、まずかけられた言葉がこれだった。

「身も蓋もねぇ……」

そんな反応に、内心かなりショックを受けながらも、俺は弁当の唐揚げをパクリ。うむ、旨い。

「たけどアリサちゃん、私達は真面目に考えて、結果ああなってしまった訳でして……」

おお！いいぞ高町、もっと言ってやれ。

「それで書けなきゃ結局無意味な思考じゃない！その言い訳はせめて何か書いた人間が言うものよ！」

「うぅ……おっしゃる通りです」

……哀れ、高町はバニングスにぐぅの音も出ないほどやられてしまったようだ。
だが仇はとらん。

と言うわけで今度は卵焼きをパクリ。
……うげぇ、ちょっと甘すぎた。
次からはもう少し砂糖を減らすとしよう。

「で？アンタは何我関せずと弁当を食ってるのよ！！アンタの事でもあるのよ、ア・ン・タ・の！」

と、こちらにむかってガオーッと吠えてくるバニングス。

むぅ、このまま高町を生け贄に、昼休みを乗り切れるかと思ったが、そうは問屋が卸さなかったようだ。

「そう言われてもなぁ……過ぎた事だし、これからまた考えれば良いことじゃねぇか。別に明日からその仕事をやりなさいって訳じゃなかろうに」
「うっ……そりゃ、まあ……そうだけど」

俺の言葉に、バニングスは言い返せないみたいだ。
うむ、これでこの話はおしま……

「でも、今のうちに明確な夢を考えておいても、何も悪いことはないと思うよ？」

Ｏｈ……月村よ、なんというさりげない、それでいて絶妙なパスなんだ。
けど、今は自重して欲しかった。

「そ、そうよ！何も悪いことはないわよ！」

ほら、バニングスに再び火がついた。

その様子を見ながら、今度はきんぴらごぼうをパクリ。

うん、やっぱり弁当のおかずは多少味は濃いめのほうがいいのか。

けど、さっきの卵焼きは甘すぎだ。

「だから！我関せずと弁当を食うなっての！！」

再びガオーッと吠えてくるバニングス。

俺にどないせぇと言うんだ、この娘っこは。

そんな俺たちのやりとりの何かがツボに入ったのか、月村はクスクスと笑っている。

他人事だと思って……

「……ふむ、しかし将来の事ねぇ……なんつーか、ぼんやりとやりたい事はあるような気がするんだよ。でも、それの形がうまくつかめないって言うか……」

「灯火君もそうなんだ。私も似たような感じかなぁ」

「ほぅ、高町もか」

「うん……はっ！」

俺と向き合って、一緒にうんうん頷いてたのに、高町が何かに気づいたような素振りを見せた瞬間、思いっきり俺から顔をそらした。

……なにこれ？何でいきなり顔をそらされなきゃならんのさ。

俺が何をしたと言うのか。

そんな高町の様子を見て、バニングスと月村はため息。
ちくしょう、何だって言うんだ、マジで。
「なのはちゃんは、翠屋を継ぐんじゃないの？」
月村が高町にそうたずねる。
前も言ったと思うが、高町は喫茶店のとこの娘だ。
当然、店を継ぐという、他の人よりも確実な選択肢が用意されているわけだ。
しかし、高町はうーんと唸る。
「それも一つの選択肢なんだけど……何て言うのかな？それをやってる自分がいまいち想像できなくて……他にやりたいこと見つければいいんだけど……」
「私、取り柄ないから……」と言葉の最後に付け足した瞬間。
ぺちん
「ふにゃ！？」
バニングスのレモン投げ攻撃！
高町の頬にレモンが張り付いた！ついでに、高町は驚いた！
「アンタ、今取り柄ないとか言わなかった？」
「え？えぇ！？ア、アリサちゃん、何で怒ってるの！？」
「理系の成績で言えば、私に匹敵する、あるいは、悔しいけど私を上回るアンタが、取り柄がないですってぇ！？」

「にゃ、にゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

バニングスが高町に馬乗りになり、頬をびろーんと引っ張る。
おぉ！かなり伸びてるぞ、あれ！つか、伸びすぎだろ！？
未だにレモン張り付いてるし。

「灯火君は全体的に成績いいよね？頭がいいならいろんなこと出来そうだけど……」
「バニングスや月村には負けるさ。それに、頭がいいから何でも出来る訳じゃないだろうし」
「それはそうだけど……」
「それに、さっきも言った通り、すぐ決めなきゃならない物でもないしな。これからゆっくり考えるさ。焦っても何も良いことは無いしな」
「そっか、そうだよね」

どうやら月村嬢は納得してくれたようだ。
さて、これでゆっくり弁当がくえ……

「このっ！このっ！このぉ！」
「いひゃい！いひゃいよ、ありひゃひゃん！」
「……取り敢えず、そろそろ止めるか」
「ふふふ……そうだね」

そのあと、なんとかバニングスを止めれたが、止めるのが遅かったのか、高町の頬がいつもより二回りほど膨らんでいた。

自分の事、将来の事（後書き）

まだ魔法に触れてないとか……
ちょっと時間かけすぎかな？

予定では、次でユーノに遭遇するはずです。
こうご期待！

あるいは、それが分岐点

「……」

放課後、誰もいないトイレの中。
そこで俺は鏡と向き合っていた。

「なーんでまた、俺はこんな風に生まれちまったのかねぇ」

そう呟く俺の視界に映っているのは、鏡の中の自分自身。
右目が緑、左目が赤を持つ俺だった。

俺はオッドアイを持って生まれてきた。
相当ガキだったころは、それこそ幼稚園に入る前位までは、特に気にすることもなかった。
しかし、幼稚園で、言われたのだ。

『右と左で色がちがうなんて、きもちわりーな！！』

それから始まる、イジメの毎日。
言葉による物から、直接的な暴力まで。

その頃になって、幼いながらも俺は理解した。

普通と違うって事は悪いことなんだ、と。
親に泣きついて、カラーコンタクトを買ってもらった。
色は無難な黒。

そして幼稚園を卒園すると同時に、俺の普通じゃ無い要素を隠しな

がらの生活。
自分を偽ってるという、違和感の様なものを抱えながらも、平穏な生活におおむね満足している。

「……っと、あまりあいつらを待たせるのも悪いよな」

じっと鏡の中の自分を見るのをやめ、コンタクトをつける。
緑と赤は、黒に隠されて見えなくなった。

「これでよし……っと」

コンタクトのケースをポケットに入れ、俺はトイレを出た。

途中、胸にさげてるネックレスを見る。
まるで十字架を象ったかのような、剣のネックレス。
行方不明になった父親が、俺に残した物。

「……父さんはオッドアイじゃ無かったんだけどなぁ」
「……思うに、アンタたちはもう少し気楽に考えてもいいと思うのよ」
「まだその話ひきずるのかよ……」

学校から帰るときも、基本的には四人で帰る。
もっとも、今日は俺以外の三人は塾があるので、俺は途中で一人になるのだが。

「もうその話はいいだろ?それよりも、そんなにゆったり歩いていていいのかよ?」
「……あちゃー、ちょっと不味いわね。仕方ないわ、近道しましょ」

そう言うと、バニングスは整備された道を外れ、薮の方へと向かっていった。

「アリサちゃん、そっちに行っても平気なの？」

「大丈夫よすずか。隣の道に出るだけだし」

月村の言葉にもなんのその。

そのままずんずんと薮を掻き分けて先へ行ってしまった。

月村は躊躇いながらも、バニングスの後を付いていく。

高町は俺とバニングス達をちらちらと見比べ、結局バニングス達に付いていった。

俺はと言うと、特に躊躇いもなく薮を掻き分けて進む。

ただ、さっきまで歩いてた道の先にある湖。

それに面して建っている貸しボートの小屋が、まるで何かに踏み潰されたかのようなひどい壊れ方をしている様子が、どうにも頭にこびりついた。

薮を掻き分けて進むと、確かにバニングスが言った通り、公園の別の道に出た。

「……あれ？」

ふと、今広がる光景に見覚えがある事に気がついた。

一見するとただの木々が左右に生えている、普通の公園の道。

見覚えがあるのは当たり前なのだが、なんと言えばいいのか。

ここで、何かがあって、その何かを俺は見ていたという、なんとも説明し難い感覚だ。

「……あ、もしかして」

その感覚の原因と思われる何かは、以外とあっさり見つかった。
今朝がたみたあの夢だ。
あの夢の中で見た光景は、この辺りではなかろうか？
そう思った時だった。

『……助けて』

頭に響くように聞こえた、弱々しい声。体が無意識に動き出していた。

「あ、ちょっと！灯火！？なのは！？」

バニングスの声が聞こえたと思ったら、俺は先程出てきた薮とは反対側にあった薮を掻き分けていた。
隣には、何故か高町が居たが。

「なんで高町まで？」
「うん……何だろう、誰かに呼ばれた気がしたの。助けてって」
「奇遇だな、俺も同じだ」

そう言い合いながらも、足は止めない。
薮を掻き分けたら、木の根っこでこぼこになった道を走る。

どちらに向かえばいいかは、なぜか理解していた。

「はわっ！？」
「っ！？ととっ……大丈夫か？高町」
「ふぇ、あ、うん、大丈夫、ありがとう」

途中で高町が地面のでこぼこに足をとられて転んだので、地面とキスをさせないうちに支える。

だが高町よ、礼はせめて俺の顔を見て言ってくれ。
そうこうして辿り着いたのは、道からかなり外れた森の一角。
ざっと見、特に何もないが、それでも俺の感覚はここに何かがあると訴えかけてくる。

「あ……！」
「どうした？高町」

高町が何かを見つけたらしく、声をあげる。
高町の方へ行ってみると、高町の視線の先、つまり地面に何かがあった。

それは、今は土埃や出血で汚れてしまっているが、実際は美しいハニーブロンドの毛並みをしているだろう生物。
一見すると、フェレットかオコジョ。
しかし、そのどれとも微妙に違う気がする。

「はぁ、はぁ、ちょ、ちょっとアンタ達、私達を置いていくなんて、どういう了見かしら？」
「いきなり走り出したからビックリしちゃた。どうしたの？二人とも」

と、そこにバニングス達がやってくる。

片やぜえぜえと肩で息をし、片や息を乱すどころか、汗一つすらかいていない。

「……何もそこまで正反対にならんでもよかろうよ、お二人さん」
「それどういう意味よ！！？」

俺の言葉を聞いて、月村がバニングスにばれないように、口元に手を当てて笑っていた事は、口に出さないでおこうと思った。

「冗談はさておき、この辺りで一番近い動物病院ってどこだ？」
「はぁ！？何でいきなり動物病院……って、なるほどね」

俺の言葉に、最初は何言ってんだみたいな顔をしたバニングスも、高町の腕に抱かれているフェレット（？）を見て、表情を改めた。
月村も、傷だらけの動物に驚いた様子だ。

「詳しく話は聞いてる暇はないみたいだね。動物病院だったらこっちだよ！」

俺達は、月村の先導のもと、動物病院へと走った。

あるいは、それが分岐点（後書き）

ようやくユーノと遭遇回。

これでようやく次ぐらいでジュエルシード暴走体とエンカウントできるかな？

遭遇するのは、忌まわしき獣（前書き）

かなり時間があいてしまいましたが、ようやく書けました。

それではどうぞ。

遭遇するのは、忌まわしき獣

「……これでよし。しばらく安静にさせなきゃだめだけど、もう大丈夫よ」
「「先生、ありがとうございます！」」

あのあと俺達は、月村が案内してくれた槙原動物病院で、あのフェレットっぽい生き物を治療してもらった。
出血などがあったが、実は見た目ほど重症ではなかったらしい。

高町たちが先生に礼を言っている横で、俺はこのフェレットっぽい生き物を見ていた。

（……こいつが俺と高町に助けを求めたと仮定して、どうやって俺達にあの声を飛ばした？それに、何でバニングス達には聞こえなかったんだ？）

病院に行く途中で、かいつまんだ説明はしておいた。
頭に声が響いて、行ってみたらなんかいた、と。
最初は信じてもらえなかったが、高町も聞こえたと言ったことから、信じてもらえたみたいだ。
そして、自分達には聞こえなかった、ともこぼしていたので、俺と高町にしか聞こえてなかったのは確か。

（それにコイツから、なんか妙な感じがする……気のせいか？）

しかも、その妙な感じと言うのが何やら懐かしさを伴っている。

と、そこで件のフェレットが目をさました。

そして、ぐるりとこの場にいるメンツを見渡したあと、高町をじっと見つめ……
いや、俺も見ているのか？

あまりにじっと見つめられていたためか、高町がそろそろとフェレットもどきに近寄る。
そしてそっと手を差し出すと、フェレットもどきはしばらくフンフンと匂いを嗅ぐようなしぐさをしたあと、ぺろりと高町の指を舐めた。
その事に、ぱぁっと表情を明るくする高町。
……何でだろうな？いつかコイツに制裁をくわえなきゃならない気がしてきた。
相手は動物なのにな。

「……あ！忘れてたけど、私達塾に行く途中だったじゃない！！」
「ああ！」

突然バニングスがそう言い始めて、思い出す。
そういやそうだったなと。
月村も思い出したのか、声をあげる。
高町は……なんかポワポワしてて話を聞いてないみたいだ。
動物とのふれ合いに、癒され過ぎているらしい。

「おいバニングス。一人それどころじゃない奴がいるぞ」
「叩いてでも正気に戻しなさい」
「あくまで自分の手は汚さないってか」

まぁ別にいいけどな。

と言うわけで……

「秘伝のデコピン！」
「にゃあ！？な、なんか痛い！おでこがすごく痛いよ！？」
痛みで正気に戻ったらしい。
確かに、姉さん直伝のこのデコピン、見た目はただのデコピンでも、痛みは段違いらしい。
姉さん曰く、従来の物より2．5倍は痛いらしい。
「正気に戻ったか？なら早く塾に行かないと遅刻だぞ」
そう言って、壁にかけられた時計を示す。
「……にゃあああああ！！急がないと怒られちゃう！！」
「そう言うことよ！こっからダッシュしないと間に合わないわよ！」
「二人とも急ごう？あ、槙原先生、ありがとうございます」
高町とバニングスがドタバタしてるなか、月村も慌てながらも礼は忘れない。
流石月村のお嬢様ってところか？
こんな感じで三人を見送った俺は、もう少しこのフェレットもどきを見てる事にした。
「君は行かなくていいの？」
「あ、俺は塾行ってないんで、もいちょいここにいます」
「ただいまー」
「おかえり、灯火。今日はちょっと遅かったじゃない」
「そう言う姉さんは珍しく帰ってこれたんだ」

あのあと、暫くフェレットもどきを観察していたが、流石に時間も時間だったので、家に帰ってきたわけだ。
すると、台所から、エプロンを着けた女の人がパタパタと玄関にいる俺に駆け寄ってくる。

この俺の前に居る、エプロンをつけ、いかにも料理中だという格好の人が、俺の姉さんである金木（カナギ）　燐火（リンカ）だ。

ちなみに、俺が珍しいと言ったのは、姉さんは仕事で基本あまり家に帰ってこないのに、帰ってきてたからだ。

人を守る仕事としか言われてないが、それがかなり忙しい仕事であろうことは容易に想像できる。

「そうなのよ！ウチの上司、ほんっと人使いが荒いのよ！？お陰で４日も灯火分が補給できなくて、欠乏症おこすとこだったわ！」
「なんの欠乏症なのさ」
「灯火分欠乏症」
「なにそれ！？」

それに、帰りが遅くなればなるだけ、それを埋めようとちゃんとコミュニケーションは取ろうとしてくるから、文句はないしね。

さすがにこれで家でも放っておかれてたら、かなりグレたガキになってたろうけど。

「……ったく、あのチビクロめ……ブツブツ」

まだ何か言ってるけど、あまり突っ込まないのが姉さんの為だろう。

「っと、ごめんね、ほっといちゃって。ご飯はもう出来てるから、食べよっか」

「ああ、そうそう」と、姉さんはリビングに向かっていた足を止めて、こちらに振り向いた。

「あの時は時間おしてたから言えなかったけど、朝御飯、おいしかったわよ」

「そっか、よかった」

素っ気ない風に言ったつもりだけど、多少照れで顔が赤いんだろうなぁ、俺。

あれから姉さんと晩御飯を食べたあと、風呂に入って後は寝るだけという状況になった。

もちろん宿題はやったし、明日を迎えるのになんら憂いはない。

ないのだが、何故か俺は、寝ようという気分にならなかった。

なんと言えば、いいのだろうか？体が妙にそわそわして、眠気が立ち去ってしまったのだ。

「んー、特にやり残したことはないし、明日なんか特別な行事があるわけでもなし……」

で、今はこうしてベッドでごろごろしてると言うわけ。

うーむ、しかし眠れん。

『誰か、助けてください！』

「……今のは？」

そうしていると急に頭に誰かの声が響いた。

それは、放課後に聞いたあの声と同じ。

「って言うことはあのフェレットもどきか？」

時計を見ると時刻は８時近く。

いくら眠気は無くても、いい子は寝る時間だし、そもそもこんな時間に子どもが一人で外出なんて危険すぎる。

だから別に我関せずで無視してもいいのだが……

「マジで何かあったとして、見捨てたら後味悪いよな！」

寝間着から着替える。そして部屋を出ようとするまえに、机の上に置いてある父さんの形見のネックレスをひっつかみ、首につける。

そして、姉さんを起こさないようにこっそりと家を飛び出し、俺は槙原動物病院に向かって駆け出していた。槙原動物病院にたどり着いた俺が見たものは、悲惨な光景だった。

まるで大型車に突撃されたかのように大きく壁が壊れた建物。あちらこちらに小さなクレーターができて荒れ果てた敷地。

この一帯だけ天変地異でも起きたのか？

ズドンッ

「っ！？なんだぁ！！？」

そんな風に思っていると、上空からなにかが降ってきた。

落ちてきたさいに発生した土煙のせいで、全容は分からないが、それでもなお赤く輝いている二つの何かがこちらを見ている。

「なんだよ……これ……？」

その何かは、煙が晴れたと同時にこちらに飛び掛かってきて、

『Ｂｕｓｔｅｒ』

しかし、俺の所にたどり着く前に桜色の光に飲み込まれた。

「……」

もはや言葉もでなかった。

変な化け物がでて、襲われそうになったと思ったら、そいつは桜色のビーム見たいな光に飲み込まれましたってか。

「民間人が居たなんて……大丈夫ですか！？」

「……は？えっと」

「足元です！あなたの足元にいます！」

「足元……？」

あまりの事態に呆然としていると、何処からか声が聞こえたので、何とか正気に戻れたようだ。

しかし、声は聞こえど姿は見えず。

回りを見渡してると足元を見ろとのこと。

声に従って足元を見てみると……

「……放課後のフェレットもどき？」

何とあのフェレットもどきがチョコンといて、俺を見上げていた。

「あの～、大丈夫でしたか……って！灯火君！？」

「この声は高ま……えぇ！？」

おまけに空から声が聞こえたので見上げてみると、そこには、どういう原理かは知らないが宙に浮いて、こちらを驚きの表情で見ている高町がいた。

遭遇するのは、忌まわしき獣（後書き）

やっと暴走体と遭遇できた……
でもまだ主人公の戦闘描写はなし。

次辺りに主人公の戦闘描写を入れたいと思っています。

十の剣、目覚める（前書き）

かなり間があいてしまった……
せめて一週間に1話は投稿したい……無理だろうけど
では、よろしければ本文をどうぞ

十の剣、目覚める

「……」
「……」

その時、間違いなく俺の時間は停止してたと思う。
だってそうだろ？クラスメイトがなんか杖もって宙に浮いてるんだからさ。

「……高町、テレビの撮影か？」
「ふぇ！？ち、違うよ！？」
「いや、違うと言われても、そうとしか聞けないだろ？」

ちなみに女児向けの番組になりそうだな。

「って！今はゆっくり話してる暇はありません！あなたは早く逃げてください！！」
「ととっ、たしかに話し込んでる暇はないか……んじゃ、高町も逃げるぞ」
「へ？いや、あのー……」

ん？なんか高町の言葉の歯切れが悪い。

「いや、だからあんな化け物、俺たちじゃどうしようもないだろ？だから逃げないと……」

俺がそう言うと、高町はさらに何かを言いにくそうに、体をモジモジさせる。

そうしている内に、高町の背後からあの化け物が近づいてきていた。
その速度はかなり早く、そのままぶつかれば高町位の大きさならかなりひどい怪我を負わされるだろう。

「高町！後ろ後ろ！」
「へ？」

俺の声に高町が後ろを見る。
しかし、化け物は既に視界いっぱいに見える位まで接近していた。

「きゃあああああああああ！！」
「高町！！」

高町を押し出し、助けようと俺の足が自然と動くが、化け物が高町に接触する方が明らかに早い。

そのまま、高町があの化け物に弾き飛ばされると思った瞬間。
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

何処からか女性の機械音声が響き、それと同時に高町と化け物の間にあった僅かな空間に桜色の光の壁が現れ、その壁に化け物は弾き飛ばされた。
よく見ると、その壁は高町と化け物の間だけでなく、まるで高町をドーム状に覆うように現れている。

「うぅ……大丈夫だってわかってもやっぱり怖いかも……」
「……」

高町はやや涙目になり、泣きそうな声になっていたが、特に驚いた風もなくそう呟く。

が、俺はその光景をぽかーんと見てることしか出来なかった。

『Ｍａｓｔｅｒ』

「うん、レイジングハートさん、お願いします！」

高町はそんな俺をおいてけぼりにし、レイジングハートなる誰かと話始める。

そして持っていた杖を弾き飛ばされた化け物に向け、

「シュート！！」

その杖から俺がさっき見た桜色のビームを発射した。

「……」

もはや言葉もでなかった。

クラスメイトがどこか遠い世界に行ってしまったんだなぁ、と呑気な事を考えるくらい、認めたくない現実だった。

「えっと、こういう訳なので、私は逃げる訳にはいかないというか、何というか……」

「そ、そうか……」

だったら話は簡単だ。

俺は早急にここから立ち去らなければならない。

女の子に戦わせて、男である自分が逃げるのは情けない気がするが、どっちにしろ、俺にはどうしようもない。

むしろ何も出来ない俺がここにいる方が高町の邪魔になるだろう。

でも、と高町と化け物をチラチラ見やる。

「大丈夫だよ。あの時灯火君は私を助けてくれたみたいに、今度は私の番！」

高町なのはという少女は、一度決めた事は絶対やり通す、言ってしまえば頑固な少女だ。

そんな高町がここまで言い切るなら、俺が何を言っても意思は変わらないだろう。

「そっか…気を付けてな、高町」

だったら俺はさっさとここから立ち去ろう。

それが最善だろうから。

高町へ激励とまではいかないが、応援の言葉をかけ、俺はこの場から駆け出した。

ｓｉｄｅ　なのは

「っ！またきた！」

灯火君を見送ったあと、もう一度黒い大きな毛玉みたいな生き物、フェレットさん曰く「暴走体」の方を見ると、まるで私が向くのを待っていたかのようなタイミングで、暴走体はこちらへ向かってきた。

「レイジングハートさん！！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

先ほどと同じように、バリアみたいなので弾いてからあのビームを撃つ！

そう思っていた。
しかし、暴走体は私を飛び越えるようにバリアみたいなのを避けた。

「えっ！？」

驚きのせいで動きが止まる。
その隙に暴走体は私の方に振り替えることもせず、まっすぐ進み始めた。

その進行方向には……

「灯火君！あぶない！！」

まだ逃げてる最中の灯火君がいた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「へ？」

背後から高町の叫び声が聞こえたので、何事かとふりかえる。
すると、なぜか俺をロックオンしたとしか思えないくらい、迷いなく俺に向かって突っ込んでくる化け物がいた。

「はぁ！？」

慌てて右へダイブ。
それと同時に化け物は俺がさっきまでいた場所をかなりのスピードで通りすぎ、そのまま正面の壁に衝突した。

「……なんで？」

さっきまで俺の事なんか眼中になかったのに、どうして急に俺に狙いを絞ってきたんだ？

そんなことを考えている内に、体勢を立て直した化け物がまた俺を狙ってくる。

「ちくしょう！俺がお前に何をしたってんだよ！」

そんなことを言ったところで、化け物は答えてくれず、むしろ突撃のペースが早くなっていく。

視界の隅で、高町が何とか俺を助けようとしているが、そんな隙すらなかった。

そして、何回目かは分からないが、突撃してくる化け物を回避したときだった。

化け物が衝突し、砕けた壁の瓦礫が、まるで狙い済ましたかのように俺の右足に当たったのだ。

瓦礫の速度はかなりの早く、しかも大人の握り拳ぐらいの大きさ。

「ぐがっ！？」

そんな物が当たって無事なほど俺の足は頑丈ではない。

折れたかどうかは分からないが、少なくとも自力で立てない事は事実。

そしてそんな好機を化け物が見逃すはずがなく、今までで最速のスピードで俺に向かってきた。

「灯火くーーーーーーん！！」

高町の悲痛な声が聞こえる。

化け物の速度はとんでもないレベルな筈なのに、やけに遅く感じる。

……え？これ、俺死ぬんじゃ？

案外、人間と言うものは、本気でどうしようもなくなると冷静になるらしい。

（あまり死にそうって実感はわかないけど……）

化け物の後ろに、高町の泣きそうな顔が見えた。

高町は必死にこちらへ向かっているようだ。

でも間に合わない。

このまま高町が間に合わなければ、たぶん高町の泣きそうな顔は、泣き顔にかわるだろう。

（それは……嫌だな）

自分のせいで、誰かが泣いたり、悲しい思いをするのはごめん被る。

だから……

（死にたくないな）

そんなことを思った。

『Ａｎｆａｎｇ』（起動します）

「……は？」

そんなことを思ったら何処からか機械音声が聞こえてきた。
そして、ネックレスが光を放ち始める。

「は？え？」

もう俺には何がなんだかさっぱりだった。
が、一つ分かることと言えば、ネックレスから放たれる虹色の光と同じ色の光の壁が、化け物から俺を守っていると言うことだった。

「な、なんだってんだ……」

やがて、ネックレスの放つ光が一際強くなる。
あまりの眩しさに、思わず目を腕でかばう。
『Ｇｕｔｅｎ　Ａｂｅｎｄ　Ｄｏｍｉｎｅ』（こんばんは、主様）
やがて、強い光が収まり、俺が目を庇っていた腕をどけると、そこには俺より少し大きい位の大きな剣が浮いていた。

十の剣、目覚める（後書き）

何をトチ狂ったかドイツ語を入れてみるという。

正直、携帯で単語ごとに調べたものを繋げたんで、正しさに自信なし。

訂正等の指摘は遠慮なくしてください。

鋼鉄剣、それは戦う力（前書き）

ＰＶ：１８，４２３アクセス

……なん……だと？

こんな初心者の文章をこんなに多くの人が見たなんて……

恥ずかしいと同時に、嬉しくもあります。

これからも、よろしければこの話をよろしくお願いします。

では、本文をどうぞ。

鋼鉄剣、それは戦う力

ｓｉｄｅ　？？？

自分は怯えていた。
突如現れたその存在に、自分は確かに恐怖を抱いていたのだ。

自分を封印しようとしているあの白い奴は、昨日の緑の奴に比べれば恐ろしいが、積極的にこちらに手を出そうとしないから、大した脅威足り得ない。

しかし、あいつは違った。

別に魔力を感じたわけでもない、しかし、体が警鐘をならす。
奴は危険だと。
自分の核たる、あの石も、あいつに対して恐怖を、危機感を、そしてなにより畏怖を感じている。

気に食わなかった。
自分が恐れているという事実が気に食わなかった。

どうしようかと考えていたが、なんとその脅威は、こともあろうか自分に背を向け、ここから立ち去ろうとしている。

それが何故かは分からないが、背中を向けているならチャンスだ。

脅威の芽が真に脅威になる前に、ここで脅威を消してしまおう。

そう決断し、あいつに飛びかかった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「ははは……もう大概のことじゃ驚かない自信があったけど、さすがにこれは驚くぜ……」

目の前に現れたのは一本の剣。
やや黒ずんだ両刃の大剣だった。

『Ｄｏｍｉｎｅ？』（主？）
「あー、すまん。何て言ってるか分からないから日本語でたのむ」
『……これでいいでしょうか？主』

その剣の鍔の近くにある、十字架を模した剣の中心にある宝石がピカピカと光ながら俺に話しかけてきた……って！

「お前！それ俺のネックレスじゃねぇか！返せよ！」
『えぇ！？さすがにそう言われたのは初めてですよ！じゃなくて、ご安心を。主のネックレス＝私ですので』
「……はあ？何言って……！」『詳しい説明は後です！今はとにかく私を持ってください、主！』

父さんのネックレスがこの物騒な剣？
ふざけるなと叫んでやりたかったが、それをいう前に言葉を割り込みされた。

「後できっちり説明してもらうぜ？」
『我が名に誓って』

ふと、先ほど弾き飛ばされた化け物をみやる。
まだ体勢を立て直せる位まで回復してないのか、地面をごろごろとのたうっていた。

「……持ったぜ」
『では。……血族の証を確認、テンコマンドメンツ、リミッターを解除します』

目の前の剣の柄を持つと、俺を中心に暗い灰色の、三角形の模様が現れ、輝く。
その光は、やがて白さを強めていき、最終的に白に近い灰色になった。それと同時に、刃の色も灰色から白銀と呼べる色になった。
それと同時に、俺は気が付かなかったが、俺自身の体にも変化が起こっていた。
といっても大きな変化ではない。
カラコンで隠していたはずの緑と赤の虹彩が見てとれるようになった、ただソレだけ。

『テンコマンドメンツ第一の姿、鋼鉄剣「アイゼンメテオール」、問題なく機能してます』
「アイゼン……メテオール？」
『主の剣、戦う力の一端です』

手に持った剣を見る。
子供の俺にとってはあきらかに大きすぎる。
しかし、俺自身は羽根のようにとまではいかないが、見た目よりあきらかに軽い。

「これで、俺に戦えって？」
『死にたくないのなら。もちろん私ができうる全力をもって、しっ

かりサポートさせていただきます』

「……」

正直言えば勘弁してほしかった。

フェレットもどきによばれ、化け物に襲われ、人外に一歩踏み入れた戦いに巻き込まれ、挙げ句のはて、俺自身も戦えときたもんだ。

『グゥゥゥウウウ……！』

そうこうしているうちに化け物は体勢を立て直し、こちらへ飛び掛かってくる。

「……冗談じゃねぇよ」

「灯火君！」

高町の声が聞こえる。

しかし、俺は動かない。

そのまま先程の焼き増しのように、化け物が俺に接近し……

ザンッ！

しかし、今度は俺が振り切った剣で真っ二つになった。

真っ二つになった化け物は、脇を通り抜け、ベチャリと地面にぶつかった。

「冗談じゃねぇよ……でもな……！」

今の俺に生き物の命を奪った罪悪感はない。

あるのは……

「ここで死ぬなんて、もっと冗談じゃねぇ！！」

子供ながらも、限りなく膨れ上がる生きる事への執着。
それを振り向かずに宣言する。
だから、自身の背後の出来事に気が付かなかった。

「っ！？よけてください！！」
『主っ！背後の魔力反応が消えていません！まだ奴は生きてます！』
「なっ！？」

いつの間にか高町の近くに退避していたフェレットもどきが叫ぶ。
それと同時に、テンコマンドメンツも俺に警告する。その言葉の通り、真っ二つになっていた化け物はぐにぐにと蠢き、やがて一つに集まり、あの化け物の姿を形作った。

そして、俺が二人（？）の言葉に後ろを振り向いたと同時に、俺に向かって突っ込んできた。

「うぉわっ！」

距離があったため、何とかよけれたが、正直肝が冷えた。
死にたくない言った次の瞬間にこれじゃ格好がつかないな……

「気を付けてください！あいつは物理的な攻撃では倒せません！核になっているジュエルシードを封印しないと！」
「マジかよ！？ありえねぇ……。くそっ、こうなりゃとことんやってやらぁ！テンコマンドメンツとか言ったか？」
『はい』
「……生き残るぜ……頼んだ」

何をとは言わない。
きっと、この初対面のしゃべる剣は、俺の言いたい事を理解してくれる。

確証？有りまくるに決まってんだろ？
なんてったって、

『……っ、はい！お任せを、主！！』

俺にこの選択を取らせたのは、紛れもなく、このしゃべる剣なのだから。

鋼鉄剣、それは戦う力（後書き）

なのはさんが灯火の名前を叫ぶしかしない不具合が発生してる……

灯火の覚醒シーンだから仕方ないとはいえ、ちょっとなぁ……

展開速度としては、これでいいのでしょうか？

何か意見があれば、ぜひ。

宝石、封印

『さて、主がやる気を出してくれたことは非常に喜ばしい事です。
しかし主、一つ問題が発生しました』
「なんだ？」

改めて気合いをいれ、やる気は十分だったが、いざ突撃と行こうとした瞬間、テンコマンドメンツがポツリと呟いた。

『……実は、今の私はアレを封印する術が無いのです』
「……」

その瞬間、なんとも微妙な空気が流れた。

「はぁ！！？」

そして、それからざっと数秒たった後、俺は口を開いた。
出たのは呆れと驚きと、その他に怒りが混じった声だった。

ちなみに、高町はぽーっとしながら、なにやら「かっこいいの……」とか言っていた。
うん、取り敢えずこれは放っておこう。
だって、そっちよりこっちの問題発言が大事だから。

「お前、言うに事欠いてそれか！？せっかく生きる意識バリバリなのにここで倒せないラスボスに出会っちまったってか！？」
『ど、どうか落ち着いて！落ち着いて私の話を聞いてください！』

俺怒涛の追求に、さすがに慌てているのかアワアワといい始めるテ

ンコマンドメンツ。『これには深い深い、虚数空間より深い訳があるんですよ！』

「おう！だったらその訳とやらをきりきり吐きやがれ！こちとら命懸かってんだぞごらぁ！！」

『ひぇぇ！』

もはや先程のシリアスな雰囲気など微塵もなかった。

しかし、そんな雰囲気などあの化け物が読めるはずがなく。

『っ！？主！避けてください！！』

「なっ！？んなろぉ！ちっとは空気読みやがれっての！」

まるでそれしか能がないと言わんばかりの体当たり。

なんとか避けたが、避けれたところで勝てるわけではない。

『これは真面目な話ですっ！私は長い眠りのせいか、はたまた他の要因のせいか、プログラムの欠損が激しいのです。つまり私は現在、持っているスペックを十分に出す事が出来ないのです』

「その欠損プログラムの中に封印術式とやらがあるってか！？」

『誠に恥ずかしながらそう言うことです』

一応納得は出来た。

言葉のはしから、テンコマンドメンツの悔しさがひしひしと伝わってきていることから、嘘ではないだろう。

だとしたら、どうすればいい？この場で封印術式を使えそうなのは……いた。

「……高町！」

「……ふぇ！？な、何！？何！？」

そう、高町だ。
今まで化け物に襲われなかった事についていろいろ問い質したいが、それはまたの機会に。
とにかく、あんなこんぶとビームを出せるんだ、封印術式とやらも使えるかもしれない。「お前、封印術式とやらは使えるか！？」
「ふういん……？」

オイ、なんで「初めて聞きました」って顔をしてるんだよ。
もしかして……

「……なにそれ？」
「ちくしょう！予想通りの返答ありがとう！ちっとも嬉しくねぇけどな！」
「な、なんで怒ってるのー！？」

怒ってない。ただ現在進行形で化け物の体当たりをかわしてて余裕がないだけだ。
そう伝える暇も無いときてるけどな！

「えっと、えーっと、フェレットさん、どうなの！？」
「なのはさん！心を静めて、そうすれば呪文が浮かんでくるはずです！」

高町が側にいたフェレットもどきにお伺いをたてる。
すると、フェレットもどきは先程のように答えた。
つまり高町は封印術式を使えるんだな！？
よしきた！

「えっと、心を静める……」

フェレットもどきの言葉通り、高町は瞳を閉じ、心を静めようとする。
すると、高町の足下に桜色の丸い幾何学模様が浮かび上がる。
それを視界におさめた化け物は、今まで執拗に俺を狙っていたにも関わらず、急に狙いを高町に変更した。
はっ！目下の危険を察知したってとこか？
けどなぁ！
「つれないな、お前さんが俺を相手に選んだのに、そりゃないだろ？」
高町の方を向いた化け物を背後から斬る。
化け物は再び二つになり、地面にベチャリ粘度ね高い水溜まりみたいになった。
「高町！お前はこっちを気にせずやってろ！」
「うん！」
高町に一言かけ、すぐさま意識を化け物に向け直す。
やはり、二つに別れた化け物の体は、グニグニと蠢きながら互いに近づき、元の体を構成した。
「うげぇ、再生過程が気持ち悪ぃ」
『情操教育に非常によろしくない光景ですね』
体を再構成した化け物は、俺に向かって体当たりを慣行する。
しかし、いい加減見飽きた動きだ。
余裕をもって回避し、しかし、回避しきった瞬間、足に鈍い痛みが

はしる。

「っあ！？」

『主！？』

おかげでその場に蹲ってしまう。

「そういや俺、足痛めてたっけ」

『くっ、応急処置として、簡易的な治療魔法と痛覚鈍化の魔法をかけてましたが、効果が切れてしまいましたか！主、動けますか！？』

「あー、さっきまで痛みを感じなかったのってそんな理由か」

まぁ、それで今まで動けてたんだから感謝こそすれ、批難する理由はない。

『本格的な治療魔法が使えればよかったのですが……申し訳ありません……っ！？主、奴が！！』

悔しさを滲ませた声を出していたテンコマンドメンツが急に慌てた声を出す。

原因は俺からも見えた。

化け物が、手負いの獲物に止めをささんと躍りかかって来たからだ。

その光景を、俺は慌てるでもなく、ただ見つめていた。

そして口許に浮かんだのは、

ニヤリとした笑みだったと思う。

たぶん、鏡を見たら我ながら悪役な笑みだなと突っ込むくらい。

「……ざーんねん、出直しな。もっとも」
「リリカル！マジカル！ジュエルシード、シリアルＸＸＩ！封印！」
『ｓｅａｌｉｎｇ』
「次があれば、だけどさ」

化け物の体に、桜色の光を放つ帯がまとわりつく。
その帯は、化け物をきつく締め上げたかと思うと、強い光を放つ。
その光が収まったとき、そこに化け物の姿はなく、かわりに青い菱形の宝石の姿があった。

「これが、ジュエルシードか……みた感じただの綺麗な宝石だな」
『ですが、これ一つに膨大な魔力が込められています。一つ扱い方を誤れば、どうなる事やら』

しばらく宙に浮いていたジュエルシードは、やがてふわふわと高町の方へ漂っていき、高町の持つ杖の先端にある赤い宝玉の中に吸い込まれていった。

「フェレットさん、これでいいの？」
「はい、ありがとうございます。それとすいません、本来なら僕がやらなきゃダメだったのに……」
そうやって、目に見えて落ち込むフェレットもどきを慰めようと、高町が口を開こうとした時だった。

ピーポーピーポー

「この音は……」
「これは……このままここにいたら非常にマズイのでは……」
「だろうな」

急に聞こえてきたサイレンと、遠くに見える赤く点滅しているように見える光。

間違いなく公僕の方々だろう。

恐らく、どっかんばっこんとやらかしてた時の音を聞いて、通報した人がいたんだろう。

「……えっと」

「テンコマンドメンツ、もういっちょ応急処置、よろしく」

『かしこまりました』

今この時、やることは一つだった。

「逃げるぞ！高町！！」

「ご、ごめんなさーい！！」

そうやって、俺たちは赤い光が見える方とは反対方向へ、思い切り走り出した。

宝石、封印（後書き）

戦闘描写がうまく出来なかったため、シリアスブレイク回になってしまった……精進せねば。

そういえば、レイジングハートとバルディッシュ、ジュエルシードを格納するたびに性能が強化されるとかいう設定があるらしいですね。

だからなんだって話ですが、その設定を前に押し出すのも面白いかも。

取って取られて……まるでコアメダルみたいだ。

魔法と世界と災いの種、ついでに灯火の体の異変（前書き）

今回はかなり難産なうえ、下手したら話がめちゃくちゃかも
それでもよければどうぞ

しかし、ＰＶ：２７，５８７アクセス……
もうすぐ3万じゃないですか（（（（（。д。；）））））
そんなに見ていただけるなんて、ありがたいですね。

魔法と世界と災いの種、ついでに灯火の体の異変

「ぜぇ……ぜぇ……な、なんとかバレないで逃げれたか……？」
「も、もう走れないよ……というか動けない……」

あの場から逃げた俺達は、近くにあった公園にいた。
もっと遠くに逃げようと思ったのだが、高町がムリだと言うので、ここで妥協した。
高町、運動神経が繋がってないのでは？と思うほど運動出来ないしなぁ……母親以外の家族はあんな人外剣術使うのに。

「……重ね重ね、すみません。こんな事に巻き込んでしまって」

そんな事を考えていたら、フェレットもどきがそう言ってきた。
ええい、お前はさっきからそれしか言えないのか。

「まったくだな」
「ちょっ！？灯火君！？」

俺のあまりにもあんまりな物言いに、高町が若干睨み付けるような視線を送ってくる。

……いや、これくらい言っても、バチは当たらないと思うんだが…
…それに、ただ責めるために言ったわけじゃないし。

「こんな厄介事に巻き込んでくれたんだ。事情とかそういった物、きっちり説明してくれるんだろうな？」

そう言ってフェレットもどきを見る。

つまり、事情説明したらそんなに責めないよ、と言うことだ。
さっきのあれは……まぁ、一言ぐらい言ってもいいだろ？

フェレットもどきは、俺の目をしっかり見据えて、

「はい。もちろんです」

そう宣言した。
軽い自己紹介を互いにし、その後に話された事は、なんと言うか突拍子もない話だった。

簡単に言うと、世界は無数にあって、それを次元世界と言う。
そして、そんなさまざまな世界で、時に見つかる、今の技術じゃ再現できない物をロストロギアと言う。
ジュエルシードはそんなロストロギアで、フェレットもどき改め、ユーノ・スクライアが発掘したそれを、警察機関みたいな組織、時空管理局に輸送中に事故がおき、この世界に落ちてきた。
自分が発掘したせいでこうなったと、責任を感じたスクライアは一人でこの世界に来て、封印しようとしたとの事だ。

「……で、ものの見事に返り討ちって事か」
「ううっ」

ったく、何で一人でやろうとするかね？
誰かとやるとか、その時空管理局とやらに任せるとか、やりようはいくらでもあった筈なのに。

「なぁスクライア、責任感じるのは結構だぜ？責任を感じようともしない奴よりはるかにましだ。でもな、人が一人で出来ることなんざたかが知れてるだろ？無茶と勇敢は違うぜ？」

「それは……そうですが……」

俺の言葉に、スクライアはしょんぼりと項垂れる。

「私も、灯火君と同じ考えかな？」

そこで、高町が口を開く。

そこでふと思った。

あの頃の高町だったら、多分スクライアと同じような考えをしてたろうな。

なのに、俺と同じ考えか……変わったな、高町も。

「ユーノ君の気持ちも、もちろん分かるよ？他の人に迷惑をかけたくない、そう思って一人で来たんだよね？」

「はい……」

「でもね、一人で何でも抱え込んだら、きっとその方が他の人迷惑だと思う」

高町がそこまで言って、俺の方を見てニコリと笑った。

「一人で抱え込んで、辛い顔、苦しい顔をしちゃう方が、他の人はすごく迷惑だって、私は灯火君に教えてもらったんだ」

「なのはさん……」

「なのは」

スクライアが高町の名前を呼ぶと、高町はそれを訂正した。

懐かしいなぁ。昔は俺も高町と呼ぶ度に訂正されたもんだ。

ついぞ直さなかったけどな、俺は。

「これから一緒に頑張るんだし、さん付けとか、敬語なんて他人行

儀は嫌だな」
「……え？」

高町の言葉に、スクライアはビックリしたのか動きを止める。

「じゃ、俺は灯火な？さん付けは許さん。敬語も許さん」
「え？え？」

何を言ってるんだと言わんばかりのスクライアの表情に、高町と顔をあわせて笑い合う。
フェレットみたいな動物が目を丸くする様子は笑いを誘ってしまう。

「なんかおかしい事言ったかな？」
「いえ、おかしいとかでなくて、これ以上巻き込むわけにはいきません！」

スクライアが慌てたようにそう言うが、俺達にしちゃ、ここまで巻き込んでよく言うなって話だな。

まぁ、それは今は置いといて。「敬語は許さんと言ったはずだ。これはお仕置きだべー」
「えぇ！？い、いひゃいいひゃい！！」

おお！こいつの頬、めっちゃ伸びる！おもしれー！

ｓｉｄｅ　なのは

「敬語は許さんと言ったはずだ。これはお仕置きだべー」
「えぇ！？い、いひゃいいひゃい！！」

灯火君がユーノ君のほっぺたをグニグニといじっている。
あんな小さい顔の、さらに小さいほっぺたをいとも簡単につかむ灯火君の器用さにくすりと笑みがこぼれる。

「うりうり！どうだ参ったか！？」
「わ、わかりまひは！わかりまひはー！！」
「まだ敬語か！懲りないフェレットもどきだなぁ！？」
「ひょわーーーー！？」

ああやって灯火君が誰かのほっぺたをグニグニとしている所をみると、あの日の事を思い出す。

『そうやって泣きそうな顔で遊ばれた方が、よっぽどめいわくなんだけど』

そう言って、私が間違ってると真っ向から言ってくれたあの日。

私は自分が間違ってるなんて、なぜか認められなくて、灯火君と大喧嘩して、最終的には周りの大人に止められるまでほっぺたを引っ張りあったり、引っ掻きあったりしたっけ。

きっと、あの日がなければ、きっと私はその内誰かを悲しませてしまっていただろう。
私にそのつもりが無くても。あの日、私の間違いを正してくれた灯火君は、私にとってはヒーローだった。

そんな憧れが、やがて恋……なのかな？になるのも、そんなにおかしなことじゃなかった。
子供の幼稚な、だけど真剣な恋。

でも、真正面からそんな事を言うなんて、恥ずかしくて出来っこない。
だから、せめて今みたいに灯火君をじっと……
あれ？灯火君、なんか違和感を感じるなぁ。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「……あ！」

急に高町が声を上げたため、俺はスクライア弄りをやめ、高町の方を見た。
ちなみに、ユーノは前足を使って器用に自分の頬を撫でていた。

「どした？高町」
「灯火君、目は何ともないの？」
「目？」

いきなり何を言い出しますか、この娘っこは。

「なんでいきなり目の事聞いたんだよ？」
「うん……だって灯火君、目の色のが……」

目の色……っ！？

「あ！？灯火君！？」

俺は持ってたスクライアを放り投げ、公園の公衆トイレに駆け込む。
高町が声をかけて来たが、それに答える余裕などなかった。

駆け込み、鏡を見る。
鏡に写ったのは、カラコンで隠している筈のオッドアイが見てとれる俺の姿だった。

「……なんでだよ」

そう呟いた俺の頭に渦巻いているのはたった一つ。

高町に見られた

ただそれだけだった。

魔法と世界と災いの種、ついでに灯火の体の異変（後書き）

うん、自分でも何を書いているのかわけわからんね

なんで俺は灯火にオッドアイ属性をつけたんだ……

いや、理由はあるんですがね、無印編じゃ大して意味ない要素だったりします。

そういやジュエルシードの封印順番ってどうだったかな……

後でアニメ見直さなきゃ。

灯火の瞳（前書き）

今回は間幕的な話なので、短いです。

それでもよければどうぞ。

「なんで……」

せっかく隠して来たのに、よりにもよって高町に見られた。
その事のショックと、見られたせいで崩れるだろう日常に恐怖し、
俺はしばらくその場から動けずにいた。

『主……』

テン・コマンドメンツはそんな俺の様子を見て、何かを言おうとしたが、止めた。
まぁ、今はそれがありがたいか。
下手な慰めとかだったらガチで再起不能になっちまう。

「……灯火君？」
「っ！？」

そうやって項垂れていると、公衆トイレの入り口から高町が顔を出してきた。
こんな事がバレたりとか、気まずいから話しにくいとか、いろんな感情が渦巻くが、何はともあれこれだけは言わなくてはならない。

「高町……ここ、男子トイレなんだが……」
「……にゃっ！？」

俺の言葉の意味が頭にようやく届いたのか、顔を真っ赤にして顔を引っ込めた。
すでに先程のシリアスな雰囲気はどこかへ吹っ飛んでいた。

「はぁ……高町の奴……」
『主にはシリアスが似合わないって言う思し召しですよ、きっと』
「……かもな」

たぶん、テン・コマンドメンツの言う通りだろうな。
誰の思し召しかは知らないが、随分空気を読んだ思し召しだ。

「さて、バレちまったし、高町には話しておくかな？」
『よろしいので？』
「ああ」

たぶん、隠そうとしても聞き出そうとしてくるだろうしな、しつこく。
トイレを出ると、高町が入り口のすぐ横にいた。
何やら俺の方をチラチラ見てはうつむくを繰り返していて、端から見たら若干怪しい。

だが、高町がそんな奇行をしている理由は分かっている。

「まぁベンチに戻ろうや。立ちっぱなしで話すのもなんだし」
「あ……うん」

まったく、なんで高町が暗い雰囲気引きずってるかね？

それから俺は高町に話し始めた。
生まれつきこんなオッドアイだと言うこと、高町に会う前のいじめが原因で、オッドアイを隠してたこと。

「まぁ、黙ってたのは悪かったと思ってる。けど、もしかしたらそ

れを知られて……お前らに普通じゃない物を見る目で見られたら、それがいやでさ。だから隠してた」

「灯火君……」

高町がそっと俺の手に自分の手を重ねる。

「大丈夫。私は灯火君をそんな目で見ないよ。それに、綺麗な緑と赤だなって思うよ？」

高町がそうやって言ってきたことに、俺は驚きで固まっていた。

今まで、この目を変だと言われたことはあったが、綺麗だと言われたことなんか一度もなかった。

姉さんでさえ、変だとは言わなかったが、綺麗だとも言わなかった。

「大丈夫、私はこんな事で灯火君を嫌ったりとか、変な物を見る目で見たりなんかしないよ」

そう言って、高町は俺の手をぎゅっと握り出した。

いつもの高町からは想像できない位大胆だと言うか、なんと言うか。

でも、それはつまり、それだけ真剣にその事だけを考えていると言うこと。

「高町……」

一一一ありがとな

俺の呟いた言葉は、果たして高町に聞こえたか。

それは分からなかった。

その時から、ちょっとだけ自分の瞳が好きになれた気がする。

夜中に出歩いてはいけません（前書き）

遅くなってすいません。
かなりスランプってました。

それではどうぞ。

夜中に出歩いてはいけません

『さて、主がちょっと自分を好きになれたところ、大変恐縮ですが、主、ならびに高町嬢に伝えねばならぬことが』
「……テン・コマンドメンツ、空気を読め」

見つめあうでもなく、ただ互いの手を重ねあっていたが、それはテン・コマンドメンツの横槍で中断された。

『ええ、私とてこのような雰囲気をぶち壊したくなんかなかったですよ！でもそれではむしろ主達が大変だと思いまして、私は心を鬼にしているのです！』

やけに力説してんな。
そこまで言いたい事があんのか。

「わかったわかった。で、何が言いたいんだよ」
『む、なにやら扱いがぞんざいな気がしますが、まぁいいでしょう。では、主、ならびに高町嬢』
「は、はい」

高町が顔を引き締める。

『……お二方、時間はよろしいので？』
「「……あ」」

テン・コマンドメンツに言われて気づく。
今、何時だ？

「テン・コマンドメンツ……」
『現時刻は、良い子は寝ている時間ですね。具体的には１０時近くかと』
背中にダラダラと冷や汗が流れているのが分かる。
高町を見ると、顔を汗まみれにしてこちらを見ている。
『ちなみに、こんな夜に無断で抜け出した……なんてことはありませんよね？私はつい先程再起動したので、その辺りは分からないのですが』
無断でございます！
無言で汗をだらだら流す俺達を見て、テン・コマンドメンツも流石に驚いたらしい。
『……え？冗談で言ったんですが、もしかしてもしかしますか？しかも二人とも！？』
「「その通りでございますハイ」」
声をあわせて言う俺達に、テン・コマンドメンツはため息を一つつき、きっぱり言った。
『今すぐかえりましょうか』
「「ハイ……」」
とりあえず、俺は明日の朝日を拝めるようにと神様に祈っておいた。
で、早速帰ろうとしたのだが、そういやユーノをどうするかを話していないことに気づいた。が、それはすでに高町が引き取る事に決まっていたらしい。

なんでも、塾で話し合ってたらしい。塾に何しに行ってるんだこやつは……

そして今度こそ帰ろうと言うことになり、高町一人（＋一匹）だけで帰すのも男としてどうなのさ、と言うことで、俺は高町を家に送っていった。

高町家の玄関には既に家族が勢揃いして、高町はお説教を受けることになった。

ついでに、俺も。ま、当然だな。小学生のガキが夜に出歩いてるんだから。

で、今度は高町兄である恭也さんに俺は家まで送ってもらうことになった。

「いや、いいですよ、こんな夜中に」

「いや、こんな夜中に子どもを一人で歩かせるわけにはいかない」

そりゃごもっとも。

「それに、何で夜中に出歩いてたかは知らないが、妹を送ってもらった礼も兼ねて、な」

改めて礼を言われ、少し照れてしまったのは内緒な？

「……恭也さん、今日そちらのお宅に泊めてもらえませんかね？」

「燐火さんに許可をとったらな」

ですよねー

さっそく逃げ道が無くなった訳だ。

何から逃げるかって？

扉越しに真っ赤なオーラとして視認できる怒気を放っていらっしゃる我が姉君からですよ。
恭也さん、なんか震えていらっしゃるし！「俺が呑まれる……だと……！？」とか言っちゃってるし！
「……よし、逝ってきます」
「ああ、逝ってこい」

覚悟を決めてドアノブに手をかける。
ん？字が違う？
ハハハ、何を仰っているのやら。

ガチャ

「……」

開けた先に広がる光景に俺は悟った。

あ、これはガチで逝ったな、と。

あれから恭也さんはスタコラ逃げるように帰っていった。
ビックリ剣術を使う一流剣士も、姉さんには敵わなかったようだ。

ひとしきり叩かれて、殴られて、間接技極められて……
そして泣かれた。
いつも泣かない姉さんが、わんわんとマジ泣きをした。

その光景に驚くと同時に、嬉しさ申し訳無さが込み上げてくる。

ここまで心配してくれてたのかっていう嬉しさと、これからも度々

姉さんを心配させてしまうんだろうなぁという申し訳無さが。
「……姉さんは寝たかな？」
『わかりません。ですが、小声で話せば聞かれることは無いかと』
姉さんが泣き止み、それぞれの部屋に別れた後、俺はテン・コマンドメンツと話していた。

「んじゃ、いろいろ聞きたい事があるが、今日はとりあえず二つ。まず、お前は俺の父さんが残したんだよな？俺に」
『ええ、主のお父上は、主のために私を残しました』
父さん……何のためにテン・コマンドメンツを……？
まぁ、考えてもわからん事は考えても仕方ないか。

「んじゃ、最後に一つ。なんでカラコンで隠してたオッドアイが出てきたんだよ？カラコン外れたのか思ったら今は普通に黒いし」
それが一番の謎。
なぜオッドアイが露になってしまうのか。

『これは推測ですが……私を扱うにはある血筋であることが条件らしいですが……』
「ある血筋……？なんの血筋だ？」
『肝心な部分は例によって破損していて、詳細は分からないのですが、とにかく、その血筋が関係しているのではないかと』
「血筋……ねぇ」
嫌な血筋だこと。
それからもいろいろな事をテン・コマンドメンツと話していた。

が、ふとテン・コマンドメンツが話すことを一旦やめた。

「テン・コマンドメンツ？」

『主、どうしてもユーノを手伝うのですか？』

「どうしたよ、いきなり？」

『また泣かれてしまうかも知れませんよ？姉君が』

テン・コマンドメンツの言葉に、少し揺らいでしまった。

「……そうだよな……」

ジュエルシードが空気を読んで昼間にしか動かないならまだしも、そんなのお構いなしだ。

今日みたいに、夜中に出歩かなきゃダメかもしれない。

『それに、暴走体との戦いで怪我を負うかも知れません、もしかしたら、死んでしまうかも』

「ストップだ、テン・コマンドメンツ」

んな事は重々承知だ。

けど、もう決めたんだ。

一度決めたら、最後までやり通せ。

姉さんがいつも俺にいう言葉。

「自分は裏切るなって、姉さんに教わった。俺はあのとき手伝うって決めたときの自分を、今さらやっぱやめるって言って裏切りたくない。だから、一度決めたらやり通すんだ」

『……そうですか』

俺の言葉を聞き、テン・コマンドメンツはしばらく黙りこくった。
やがて、ふわりと俺の顔の前に浮き上がり、宣言した。

『ならば、未だに不完全なこの身なれど、このテン・コマンドメンツ、主の思いを貫く刃となりましょう』
「……ああ、よろしくな、テン・コマンドメンツ」

俺の手のひらに着地したテン・コマンドメンツをぐっと握る。

こうして、俺は戦うこととなった。
おまけ　～その頃のなのはさん～

「今日はいろんな事があったなぁ……疲れたぁ」

灯火君が帰ってから、私はお父さんとお母さんにお説教をされた。
それがついさっき終わったのだ。
思わずベッドにダイブする。

「うぅ……お兄ちゃんが灯火君送っていってくれてよかった……じゃなきゃお兄ちゃんにもお説教されてたよぅ」

その光景を想像し、ぞっとする。
頭をぶるぶる振って、恐ろしい光景を振り払う。

「……よし、寝よう」

このまま起きてても疲れるだけだ。
そう判断し、私は寝間着に着替える。
ちなみに、ユーノ君は家に帰る途中で気を失ってしまっていたので、用意したかごに寝かせてある。

説教前に、先にユーノ君を休ませたいと言っておいて正解だった。
寝間着に着替えたらベッドに潜る。
「ホントにいろいろあったなぁ……」
さっきまでの出来事を振り替える。
魔法使いになったり、灯火君も魔法使いになったり。
（そういえばあの時の灯火君、かっこよかったなぁ……）
それに、灯火君の秘密を教えてもらって、いろいろ話し……
そこまで思いいたって、顔が熱くなる。
（そう言えば、私普通に灯火君と話してた！？）
なんやかんやあって、そこら辺はまったく、気にしてなかったが、
確かに自分は灯火君と話してたはず。
しかも、真っ正面から顔を見据えて。
（は、恥ずかしいよぅ……）
プシューっと顔から何か湯気みたいなのがでた気がした。
そして、しばらくうーうー唸って、思う。
（恥ずかしすぎて、寝れないよぅ！！）
高町なのは、９歳。

初心とかそんな次元を越えた恥ずかしがりだった。

「そういや、今日は高町、顔見て話してくれてたな」

どこぞの少年がそんなことを呟いていたかは、剣十字のみが知っている。

夜中に出歩いてはいけません（後書き）

原作がどうであろうと、他の方のなのはがどうであろうと、ウチのなのはは好きな人と顔を合わせられない初心ちゃんなのです。

そんな子が、恋のライバルに触発されてあれやこれや……

萌えませんか？そういうのって。

神社と犬と新たな力（前書き）

ちょっと文が長くなってしまいました。

それでも良ければどうぞ。

神社と犬と新たな力

「……ねみぃ」

現在授業中。
俺は先生に気付かれないように、こっそり欠伸をする。

まぁ、俺がこんなに欠伸をいているのは、自業自得なんだけどさ。
昨日……というか、今日の午前1時位までテンと話してたからな……

あぁ、ちなみにテンって言うのはテン・コマンドメンツのことな？
いちいち長いからこう呼ぶことにした。

そういや、これからテンと呼ぶと伝えたあとにテンが、『私は青森は奥入瀬の……』とかなんとかいう呟きを残したが、何だったんだろうか？
あと『まさかユーノと同等の扱い！？』とか。

「……くぁぁ」

まぁどうでもいいか、とにかく眠い。
が、寝るわけにはいかない。
それは、さっき言ったように、現在授業中であるからでもあり……

「……」

なんか隣に座っていらっしゃる高町さんが俺をじっと睨んでいるからでもある。

「……」
（おい、なんか高町が睨んでくるんだが、俺はあいつに何かをしちまったのか？）
（今日の行動からは、彼女の機嫌を損ねそうな要素は見当たりませんが……睨んでますね、おもいっきり）
「……じぃー」
しまいには口で擬音を言い始める始末。
（ホントに、なんだってんだ……）
こうして俺は、理由は分からないが高町に睨まれ続けることとなった。
ちなみに、俺をじっと睨んでいたせいで、先生に当てられても答えれなかった高町を何回かフォローしたことを、ここに追記しておく。
「……」
「いや、無言のまま睨まれ続けるのって相当こわいから、もう勘弁してくれ高町さんや」
「睨んでないもん」
現在進行形で睨まれております、はい。
現在放課後。
今までずっと睨まれ続けていたのだ。
そう、朝から今まで、言葉に偽りなく。
普通の授業中はもちろん、体育の授業中も、昼休み弁当を食ってる最中も。
正直、気が滅入る。

おまけに睨まれてるせいでバニングスに「なのはになにやったのよアンタはぁぁぁぁぁ！」と叫ばれ、頭シェイク食らうし、月村はにっこりと笑みを浮かべ、「ちゃんと謝らなきゃだめだよ？」と言われるし。
ちなみに、その笑顔はめっちゃ怖かったです。

『まぁ、笑顔とはもともと相手を威嚇する、あるいは相手に威圧感を与えるための物ですし』

とは、月村が怖いと漏らした俺に対する、テンの言だ。

「……はぁ」

今日はバニングスも月村もピアノだかバイオリンだかの稽古があるから、こんな状態の高町と二人で帰らなきゃならんのか。

「……」
「……こう言うとき、なんて言うんだったかな」
『鬱だ、死のう。でしたっけ』

そいつだ。

未だに睨んでくる高町に見えないように、もう一度こっそりため息をつきながら、俺はそんなくだらないことを考えていた。
『なのは！灯火！ジュエルシードを見つけたよ！もう発動して暴走してる！！』

帰り道の途中、俺の頭にスクライアの声が響いた。
この念話とかいった物は未だに慣れない。
頭に直接声が響くって、以外とキツいんだよなぁ。

それよりもだ。

『おいおい、お前まだ本調子じゃないだろ？なんでジュエルシードを探してんだよ』

『やっぱり僕が原因でもあるし、ずっと休んでる訳にはいかないからね。ケガ自体はもう治ってるから、せめて捜索ぐらいはって』

今の念話は高町にも聞こえてるはず。

高町の方を見て、この事を知ってたかの意を込めた視線をおくる。

俺の思ってる事を理解いたのか、高町は首を横にぶるぶる振っている。

スクライアの独断かよ。

『まぁ、いろいろ言いたいことはあるんだが、それどころじゃないか』

『そうだよ。ユーノ君、どこで見つけたの？』

『えっと、神社とか言う建物がある所から反応がある！急いで！』

神社っていったら……

「神社って、あそこじゃね？あの狐がいる神社」

「そうかも！久遠ちゃんが危ない！」

「急ごうぜ！」

俺たちは現在向いている方向から１８０。方向転換し、駆け出した。

普段はそうそうしないうちにバテる高町も、かなり無茶をして走っている。

よほど久遠が心配らしい。

「着いたとき戦えないなんて言わないように、あまり無理して走んなよ！」

「でも！久遠ちゃんが心配だよ！」

頑固だねぇ。

『主、そして高町嬢、言っておきたい事があります』

そろそろ神社へ着くと言うタイミングに、テンが不意に声をかけてくる。

「なんだよ」

『主の命に関わる事なので、言っておきたいのです。現在、私はプログラムが欠損していると、以前申しましたね？』

「だな」

『その欠損しているプログラムの中に、騎士甲冑生成のプログラムがあるのです。現在最優先で再構築していますが、もう少しかかります』

「騎士甲冑？」

聞き覚えのない言葉に、高町が反応する。

『騎士甲冑とは、高町嬢のバリアジャケットと同じ、防護服の事です。それを生成できないと言うことは、主には常に死の危険が付きまとっています』

それを聞いて、高町が大きく反応した。

「え！？死ぬって……」

『正確には、高町嬢にも付きまとっていますが、主にはより強く付きまとっている、と言うことです』

それを聞いて思い出す。

そういや、初めて起動させた時も、高町見たいに服装は変わらなかったな。

それを聞いて、高町はこちらを見て、口を開いた。

「灯火君は待ってて。私とユーノ君で封印してくるから」

そう言いはなって、高町は境内への階段をかけ登っていった。

「なっ!?おい、高町!ってこら、待て!」

『主、ここは高町嬢を信じましょう。それが最善です』

「テン!?」

『防護服の無い主より、彼女の方が無事な確率は高いのです!ここは堪えて下さい!』

「……くそっ」

一緒に戦うって言ったのに、この様かよ……

『申し訳ありません。もっと早く言っておけば……いえ、私がもっと早くプログラムを再構築できれば……主の剣となると誓っておきながら、この体たらくとは……!』

テンの悔しさをにじませた声に、冷静さを取り戻す。

「……いや、お前のいう通りだな、今回は待ってるか。次までには再構築も終わってるだろうし」

『申し訳ありません……』

「謝るなよ、お前が悪い訳じゃないだろ?」

だったら、信じて待ってようかね。

そう思った瞬間だった。

『っ！？主！高町嬢が！！』

「何っ！？」

テンの声に顔を上げると、高町が弾き飛ばされたのか、かなりの速度でこちらに飛んできた。

途中でふわりと宙に浮き、何かに衝突と言う事態は避けたが、その間に、犬がでかくなったような姿の暴走体が高町を宙から叩き落とそうと飛びかかった。

高町は桜色の障壁で暫くこらえたが、パリンとガラスが割れるような音と共に障壁が砕かれた。

そして、叩き落とされる。

「高町ぃぃぃぃぃ！！」

急いで高町が叩き落とされた地点にかけよる。

「うぅ……痛いよぅ」

高町はそう言いながらも、自力で立ち上がった。

なんとか無事らしいと言うことに、ほっと安心する。

「大丈夫か？」

「痛いけど、大丈夫。レイジングハートが守ってくれたから」

高町のその言葉に、レイジングハートは杖の先にある赤い宝石をピカピカと点滅させた。

と、そこに動物の唸り声がする。

見ると、暴走体は完全にこちらを見ていた。

「テン、こりゃプログラム再構築まで待ってるのは無理みたいだ」
そう言ってテンをセットアップ。
アイゼンメテオール形態のテンを暴走体に突きつける。
「高町、この状態じゃ俺も逃げれないみたいだし、戦うぜ？」
「そんな事……っ！灯火君、前！」
前を見ると、暴走体はこちらに向かってきていた。
「っ！？だったら！！」
何も持っていない左手を開いてつき出す。
すると、手のひらの先に、白っぽい灰色の光を放つ三角形の模様が浮かび上がり、暴走体が振り上げてきた前足での一撃を防いだ。
「一応テンに聞いて、防御魔法くらいなら使えんだよ！」
そしてテンを振るう。
しかし、暴走体はそれを軽々とかわした。
「こいつ、前の暴走体より強い！？」
「ユーノ君が、確固たる物質を取り込んだから、前より強くなってるって言ってたよ！」
そう言いながら、高町は桜色の球体を暴走体に向かって放った。
「ディバインシューター、シュート！」

ディバインシューターはほとんどが避けられてしまった。
何個かは当たったのだが、それは決定打にはななかったようで、暴走体はピンピンしている。
そして仕返しとばかりに高町へ向かっていき、前足を振りかぶる。

「させっかよ！」

ガキィン

金属同士がぶつかり合ったような音が響く。

「～～～っ、腕が痺れるなぁおい」
「灯火君……なんで」

いや、ここでなんで聞きますか？

「なんでもなにも、さっきみたいにバリア破られたらヤバイだろうが」
「だからって！」

ぎりぎりとテンの表面が擦れる音がして、だんだん向こうが込める力が強くなっていく。
けどこっちも力を込め、それに対抗する。

「っ！一緒に、戦うって、言ったろうに……っ！」

そうだ。
ジュエルシード集めを一緒に頑張るって言ったんだ。
だから……っ！

「退くわけにはいかねぇんだよ！！」

そう叫ぶと同時に、足元に三角の魔方陣が現れ、テンが光だす。

『……やっぱり戦ってますか。こうなるとは思ってましたが』

「テン！？お前今まで何で反応しなかったんだよ！？」

『ＡＩ機能も一時的にカットして、プログラム構築を優先しました。あんな光景をみたら、主はきっと無茶してでも戦うと思いましたし』

光に包まれたテンはやがて形を変える。

そして、魔方陣はその色を白に近い灰色から橙色へと変化させていき、光は徐々に弱くなって……

『では、景気よくぶっ飛ばしましょうか』

ドガン！

爆発した、暴走体が。

「はぁ！？」

いや、何今の！？

そんな俺の心の内を無視するように、テンが言う。

『テン・コマンドメンツ第二の姿、爆発剣「エクスプロージョン」、正常に機能しています』

神社と犬と新たな力（後書き）

なんか無駄に展開が長い気がするなぁ。
もうちょいコンパクトに、かつ内容の濃い話がかけるようになりたいです。

灯火のバリアジャケットと言うか、騎士甲冑は次回で出します。

爆発剣、障害を打ち倒す力（前書き）

珍しくスラスラとかけました。

それではどうぞ。

あ、あと活動報告でちょっと相談事があるので、暇があったら見てやってください。

爆発剣、障害を打ち倒す力

『テン・コマンドメンツ第二の姿、爆発剣「エクスプロージョン」、正常に機能しています』

テンの姿はすっかり変わっていた。

刃は普段の巨大さはなく、やや細い物になり、色は鮮やかな橙色となった。

「エクスプロージョン……？」

『爆発剣の名の通り、何かに接触すると爆発術式が自動で発動し、対象を爆発で攻撃します』

「こわっ！？」

つか、んな危ない物になるなよ！？

『ご安心を。主を爆破するようなヘマはいたしません』

「そう言う問題じゃ……ぬわ！？」

爆発で弾き飛ばされた暴走体が再びこちらへ腕を振りかぶる。

それをまたテンで防ぐ。

すると、また爆発が発生し、暴走体は吹き飛ばされる。

『それと、騎士甲冑生成プログラムも再構築完了しました。もう少し時間がかかるかと思いましたが、意外と早く済みました』

「だったらさっさと頼むぜ。高町！時間稼ぎ、出来るか！？」

「へ？……あ、うん！」

いきなりの出来事に着いてこれてなかった高町も、俺の声で正気に戻ったのか、返事をしたあとディバインシューターを放つ。

さっきの教訓か、距離を多目にとって戦っている。

「んじゃ、こっちもちゃちゃっと終わらせようか」

『分かりました。では、自分の甲冑をイメージしてください』

自分の甲冑……甲冑……

『別にあのごてごてした鉄塊でなくても大丈夫です。騎士甲冑の防御能力に、見た目はさして影響しないので』

そうなのか。

だったら動きやすい感じで……

「こいつでどうだ！」

全体の形をイメージし終わったと同時に、今着ている聖祥大附属小の制服が一瞬光に包まれて見た目が変わる。

さらにその形が変わった服の上に、光が集まり、ジャケットを形成していく。

『騎士甲冑生成完了しました。イメージ通りに出来ているでしょうか？』

テンに言われて出来上がった騎士甲冑を見る。

上半身は白無地のシャツの上に、黒い長袖のジャケット。

ジャケットの襟はファーのような物があり、二の腕辺りにはテンの待機状態に似たデザインの十字架が描かれている。

下半身は動きやすい白のズボン。
靴も動きやすいように、黒いスニーカーのような形だ。

「おお！完璧だ。でも襟のモコモコはいらないかもな」

なんか俺には合わない気がする。

『では、襟は普通にしておきますか』

テンがそう言うと、襟に光が集まり、モコモコが消え、普通の襟になった。

「よし、これで大丈夫だな。さて、高町の援護に行きますか」

そう呟き、俺は話に聞いていた飛行魔法を使って、高町が暴走体と戦っている方へと飛んでいった。

「おお！話には聞いてたが、マジで空飛んでるよ！すげぇ！！」

『主、興奮する気持ちも分かりますが、急いだ方が良さそうです。あの暴走体のスピードでは、高町嬢も封印する隙が無いでしょう』

「了解！」

俺はそのまま飛行魔法で空を飛び、暴走体に接近する。

「おらぁ！！」

そして、そのままテンを、高町に飛びかかろうと空中にいた暴走体に叩きつける。

エクスプロージョン形態　なので、すぐさま爆発が発生し、先程の高町がやられた事の意趣返しと言うわけではないが、暴走体を地面

に叩きつけた。

「はっ！ざまぁみやがれ！！」

『高町嬢、今のうちに封印を！』

「はい！リリカル！マジカル！ジュエルシード、シリアルＸＶＩ！封印！」

『Ｓｅａｌｉｎｇ』

以前のように、桜色に光る帯が暴走体を拘束していき、やがて暴走体は光に包まれて消滅していく。

残ったのはＮｏ．１６のジュエルシードと……

「……子犬？」

茶色い毛並みの子犬だった。

「どういうこった、こりゃ」

「ジュエルシードが生物を取り込んだんだ。だから今日の暴走体は強かったんだ」

いつの間にか、高町の肩の上に、スクライアが居座っている。

「スクライア、今までどこ居たんだよ？空気薄いな」

「う……好きで薄い訳じゃないよ……」

「そいつぁ失敬」

スクライアとそう言うやり取りをしているうちに、ジュエルシードはふわふわと移動していき、レイジングハートに格納される。

『Ｒｅｃｅｉｖｅ　Ｎｏ．ＸＶＩ』

「ま、何はともあれ、今回も上手くいったな」
「うん！」

スクライアの話だと、ジュエルシードは全部で２１個。
のこりは１９個か……

「この調子で、残りもガンガン回収していこうぜ」
『のちになれば、私もプログラム全体を再構築できるでしょう。そうなれば効率はさらにあがりますね』
「ユーノ君のために、頑張らなきゃ！」
「皆……ありがとう」

スクライアが涙を若干浮かべ、礼を言う。

「気にすんなよ、ダチだろ？」

そう言ってスクライアの頭を撫でる。

「ダチが困ってたら、それが悪事じゃないなら手を貸す、そう言うもんだ」

我ながら恥ずかしい言葉を発した気がするが、まぁいいだろう。

「さ、帰ろうぜ。前みたいに夜中帰りとかやっちまったら、洒落にならんからな」
「うん！」

そこで帰ろうと思ってふと思い出す。

「あ、この子犬どうしよう」

「「あ」」

反応からして高町とスクライアも忘れてたらしい。

ちなみに、子犬は境内で気絶してる飼い主にちゃんと返した。

おまけのなのはさん　～睨みの訳～

「そう言えばなのは、今日は灯火と普通に話してたね」

「うん！これからちゃんと顔見て話せるように、今日は訓練してたもん！」

「訓練？」

「どんなに恥ずかしくても、じーっと灯火君を見てるの」

「……もしかしてずっと見てたの？」

「うん！でも灯火君ひどいんだよ？恥ずかしいの我慢して、ついでに眠いのも我慢して訓練してたのに、灯火君は私が灯火君を睨んでるなんて言うんだよ！？」

「はぁ……」

なのはの睨みの理由。

恥ずかしさと眠気を必死に耐えながら見ていたため、目に力が入りすぎてる様子を灯火が勘違いしただけ。

「そういや、今日は久遠でてこなかったな」

夕食中、少年がそう呟いたかは、剣十字のみが知っている。

爆発剣、障害を打ち倒す力（後書き）

文章じゃ分かりにくいので、一応言っておくと、灯火の騎士甲冑はハルの服装を少し変えたものです。
具体的には襟のあのモコモコを取っ払いました。

ところで、ハルのあの黒い上着はジャケットで合っているのだろうか。
違ってたら言ってください、顔を恥ずかしさで真っ赤にしながら直します。

巨木のゆりかご（前書き）

今回はタイトルが難産でした。

ぶっちゃけ、話を書くとき何に悩むかって言えば、タイトルだと思います。

二つ目のジュエルシードを封印してからしばらくたった。
あれからジュエルシードの反応は特に無く、俺と高町は何時ものようにスクライア、レイジングハート、テンに魔法の講義やら実践やらを受けていた。

で、現在。

「……どうしてこうなった？」
「灯火くーーーん！がんばれーーー！！」
「灯火ぁぁぁぁ！負けたら承知しないわよーーー！！」
「灯火君！ファイトだよ！！」

なぜか俺は士郎さんがコーチを努めるサッカーチームのユニフォームをきて、こうして芝生の上に立っている。

ちなみに、先程の応援は上から高町、バニングス、月村の順番だ。

もう一度言わせてもらう。

「どうしてこうなった……？」

急に高町に携帯で呼ばれたので、取り敢えず行ってみたら、そこには士郎さん以下サッカーチームのやけにキラキラした目に出迎えられ、何が起こっているのか分からないままあれよあれよと事が進み、気が付いたらこうなっていた。

「いやぁ、うちの選手が一人ケガで退場しちゃってね。このままじ

ゃ途中棄権しなきゃだめかと思ってたんだ」

とは士郎さんの言。

つまり、簡単に言えば俺は一人抜けた穴を埋めるために呼び出された訳だ。

『高町、後で覚えてろよ……？』

「っ！？」

俺が念話で怨み言を言うと、高町がビクゥ！と反応し、バニングス達に不審がられる。

これぐらいは仕返ししてもいいだろ？

で、試合に出たわけだが……

（なんか全員トロい）

そう、相手の動きもチームメイトの動きもやけにトロく感じるのだ。

（今だって、ほれ）

俺のとこにあるボールを狙って相手チームの一人が向かってくるが、それを楽々かわし、味方にパス。

味方の動きもトロいから、動きを予想してパスを送るのも簡単だ。

俺からパスを受け取ったチームメイトは、そのままシュート。

ボールはゴールネットに突き刺さった。

ｓｉｄｅ　なのは

私は灯火君の動きに見とれて、応援することを忘れてしまっていた。
私の隣にいるアリサちゃんもすずかちゃんも、驚いた表情で灯火君を見ている。
いや、今やこの場にいる全員が灯火君を注目していた。

後ろからボールを奪いにいった相手チームの人を、まるで後ろに目がついていて、見えていたかのようにかわす。
かわした隙をついて、スライディングでボールを掠めようとした相手には、ボールを爪先で上に蹴りあげる事で対処する。

蹴りあげたボールは、弧を描き、まるでそこが自分の居場所だと言わんばかりに、灯火君の前に落ちてきて、灯火君はそのままボールを蹴り、味方へボールをパス。

こうして、いつの間にか灯火君がこの試合を支配しているかのような展開となった。

結果、お父さんのチームは６－０という、普通ではあり得ない得点で圧勝した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ適度に手を抜きつつ試合をした結果、チームは６－０というあり得ない点数で勝った。
……いや、６点ってあり得んでしょ、マジで。

なんかチームメイトには尊敬の眼差しで見つめられるし、士郎さんに至ってはチームに正式に入らないかと勧誘してくる始末。

（しかし、ありゃ何だったんだろうなぁ……）

俺はそんな空間の中、マルチタスクで士郎さんと話している裏で、今日の出来事を思い返していた。
あの、周りがやけにトロく感じたあれだ。

『まぁ、普通に考えたら、半ば命懸けの戦いをしている主と、たかが玉遊びしかしていない彼らでは、どちらが動けるかは明確ですがね』
（そういうもんなのか？）
『ええ、恐らく。彼らの動きが暴走体に勝るとは考えられませんし』
（まぁ、確かに）

そんな奴が相手にいたらヤバいだろうな。

そんな事を考えていたら、いつの間にか俺のそばに高町たち三人娘が来ていた。

「すごい！すごいよ灯火君！かっこよかったよ！」
「ほんと、なのはちゃんのいう通りだよ。お疲れ様、灯火君」
「ま、まぁ、何時もよりはかっこよかったって、思わなくもないわね」
「ツンデレ乙」

上から順に高町、月村、バニングスの順だ。
ただ、バニングスの反応があまりにテンプレだったので、つい口を滑らせてしまった。

もちろんバニングスに殴られた。痛ぇ。
その後、士郎さんが翠屋で祝勝会をすると言っていたが、丁重にお断りして、俺は商店街へ向かった。
ぶっちゃけて言っちゃうと、俺はもともと夕飯の材料を買おうと思

っていたのだ。
そこで高町からのお呼びだしが来たわけだが。
と言うわけで、商店街で本来の目的を達成し、現在は帰宅途中だ。
が、神様ってのは相当ひねくれた奴らしい。
『主、ジュエルシードの反応があります。……っ！かなり近いですっ！！』
「なっ！？」
周りを見渡す。
まだそんなに遅い時間じゃないから、当然人が大勢いる。
そんな場所の近くでジュエルシードが発動したらどうなる……？
「詳しい場所は！？」
『ここから3メートル先を右折したところです！ですが間に合いません！！』
荷物をゆっくり置く間も惜しく、ぱっと手を離し、テンをセットアップした瞬間。
俺の視界は光に包まれた。
次いで何かに殴り付けられたかの衝撃。
「ぐぁっ！？」
甲冑の展開の方が一瞬早かったため、なんとかなったが、少しでも遅れてたら比喩なしでミンチになっていただろう。
「なんだってんだ……って、なんだよ、これ……？」

俺の視界に飛び込んだのは、コンクリートを突き破り鎮座する巨木。
あまりの出来事に、呆然としてしまう。

『主！上です！！』
「なっ！？」

だから、上から降ってきた瓦礫に反応出来なかった。
既にかわすことも、防御魔法を展開することも間に合わない距離まで、瓦礫は来ていた。

「やば……っ！？」

どうすることも出来ず、俺はそのまま瓦礫にのまれていった。

巨木のゆりかご（後書き）

リリカルなのは～十の剣を持つ者～、完！！

……な訳では無いので、ご安心ください。

次回は今まで以上に灯火の出番がない……

まぁ、相手があれだから仕方ないですよね？

後悔の先へ（前書き）

前もって言います。

批判、指摘、その他もろもろ、バッチこいやぁ！！

……嘘です。

お手柔らかにお願いします。

後悔の先へ

「……ってぇ……」

俺、どうなったんだっけか？
確か、ジュエルシードが発動して、でっかい木が生えて……
あぁ、思い出した。そのあと瓦礫に押し潰されたんだっけ？
と言うことは、俺死んだ？

『ご安心を。あなたはまだ死んでいませんよ』

急に目の前に光の球体が現れ、その球体から女の人の声がする。
……誰だ？

『まぁ、私のことはまた今度にでも。それよりも、こんな所で寝ている場合ではありませんよ？』

地の文もとい心を読まないでください。
まぁ、それはそれとして……

「寝てる場合じゃないって言われたって、今こうしてあんたと話してるんだけど？」
『ここは……まぁ、あなたの精神が形作った空間……でしょうか？で、今あなたは精神体みたいな物です。あなたの肉体は瓦礫の下で気絶中ですよ』
「なるほど……よくわからんが、気絶してるから俺はここにいる、と？」
『ありたいていに言えば、そうなります』

ふむぅ、となると、確かにさっさと起きなきゃならんな。
でも、どうやって？

『ご心配なく。その為に私がいるのです』
「……話がトントン拍子に進んでわけわからんが、まぁ、ありがとう……？」
『どういたしまして』

光の球体が一際強く輝く。
すると体がふわりと浮き上がる感覚がした。

「そうだ、名前！あんたの名前は！？」

俺の言葉に、球体はしばらく黙って、

『私は、■■■■■と申します。いずれ、また会うことになるでしょう』

そう答えた。
気が付くと、俺の視界に青い空とでかい木、そして虹色の光が映った。

『主、ご無事ですか！？』
「あ……テン？俺、どんぐらい気絶してた？」
『数分です。それほど時間は経っておりません』
「そいつは重畳。で、この虹色の光は何？」

俺は俺をドーム状に包み込む光を指差して聞いてみた。

『それが分からないんです。主が飲み込まれてほどなく、この光が

瓦礫を吹き飛ばしたのです。一応、主の魔力によって構成されてるみたいですが……』

んなこと言われたって、特に術式組んだわけでも無いしなぁ……

「あ、消えた」

そんな事を思っていたら、その虹色のドームはふっと消え去った。

あの虹色の光は気になるが、今はそれについて考えてい暇はないと思いなおし、テンを起動させ、飛行魔法で空を飛ぶ。

「高町たちはもう来てるのか？」

『5時方向にあるビルの屋上に、高町嬢とユーノの魔力反応を感知』

「5時……あぁ、右後ろの事か」

見ると、確かに白いバリアジャケットを着た、高町がいた。

高町は、足元に桜色に輝く魔方陣を発生させ、レイジングハートを構えている。

「……雰囲気からして、俺の出番なくね？」

その言葉と同時に、閃光。

いつぞや見た、桜色の太いビームが、まっすぐ巨木の方へ向かい、着弾。巨木は光の粒子となって消えていき、巨木のあった方向から、青い光が高町の方へ向かっていく。おそらく封印されたジュエルシードだろう。

高町はレイジングハートを掲げ、何時ものようにジュエルシードを回収した。

「高町ーー！スクライアーー！」

その様子を見届けた俺は、高町たちの所へ向かう。

「灯火君！大丈夫だった！？」

「いくら念話で呼んでも反応がなくて、心配したんだよ！」

そうだったのか……二人にゃ悪いことをしたな。

「心配かけて悪かった。ちょっと油断して瓦礫の下で生き埋めになっててな。気絶してた」

「生き埋めって……そんな呑気に言えることじゃないよ……」

俺のあまりにもこざっぱりした言い方に、スクライアは呆れ顔になる。

というか、フェレットの呆れ顔ってなんだろうな？自分で言っておいてあれだけど。

「ええっ！？生き埋め！？大丈夫だった！？怪我はない！？お腹空いてない！？」

おい高町、前二つは分かるが、最後のお腹空いてないってなんだよ？

「何日も生き埋めになってたわけじゃねぇよ、ちったぁ落ち着け、高町」

と言いながら秘伝のデコピン。

何時ものようにあまりの痛さに、高町は地面を転げ回ることになっ

た。

「うぅ……心配しただけなのにぃ……」
「しすぎだっての。ほれ、ぴんぴんしてるだろ？」

そう言って、体のあちこちを動かしてみる。

実際、瓦礫にのまれた割には、体の何処にも怪我はなく、せいぜい砂ぼこりがちょっとついてるぐらいだ。

「そっか……よかったぁ……」

俺のそんな様子を見て、高町も納得したようだった。

「んじゃま、帰ろうぜ」
「うん！」

もうここにいる理由はない。
そう言うわけで、俺たちは一緒に帰ることになった。
で、今は一緒に帰ってる最中だ。

あ、もちろん買った商品は回収してきた。
多少ほこりまみれになったが、奇跡的にすべて無事だった。

それはともかく、何やら高町の様子がおかしくなってきた。
先程までは嬉しそうな表情をしながら歩いていたのだが、次第に表情が沈み始めたのだ。

「……はぁ」

これは最近は減ってきたが、昔の高町の悪い癖だった物だ。
何か言いたいことがあっても、それを言わず、一人で抱え込んでしまうのだ。

「……高町、昔に戻ってるぜ？」

俺の言葉に、「あっ」と声をあげる高町。

「言ってみな？何でそんな浮かない顔してんのかをさ」
「……うん」

最初は言うことを戸惑ったが、やがてコクリと頷いて、ポツリと始めた。

高町曰く、今回発動したジュエルシードを、高町はあらかじめ見かけていたらしい。
何でも、士郎さんのサッカーチームの一人に、女の子が渡しているのを見たんだそうな。
でも、高町はそれを見間違いと思い、ほっといたらしい。

「……つまり、あの時ほっとかなかったらこんなことにはならなかった。こうなったのは私のせいだ……と？」
「うん……今回ので、きっと怪我した人とか一杯いる。もしかしたら、し、死んじゃった人もいるかも……」
そう言って、高町は完全にうつ向いてしまった。

まったく、お前さんという奴は……

「そうだな、今回は失敗しちまったな」

俺の言葉に、高町はビクゥッと大きく反応する。
別に責めようって訳じゃないんだから、そんなにでかい反応しなくても……
「……今回は失敗しちまったな。じゃあ、これからだ」
「……へ？」
俺は高町の方へ振り向く。
「確かに、今日のあれで怪我した人とかいるかもしれないしさ、反省したり、後悔したりとかは大事だと思うんだ」
そこで一旦言葉を切る。
まだ高町は顔をうつむかせている。
けど、きっとこの言葉は届くはずだ。
「でも、それだけじゃダメだ。大事なのは、そのあとどうするかだ」
「その……あと？」
「ああ。高町は十分後悔した、十分反省した。じゃあ、それからどうしたいんだ？」
「私は……」
高町の後悔に揺れていた瞳が、やがて揺れを止めた。
「私は……強くなりたい。二度とこんなこと……誰かが傷ついたり、悲しい思いをしないように、そんな事をさせないように、強くなりたい！」
……高町、お前さんはもう十分強いよ。
普通だったら、一度あんなことあったら諦めちまうと思うからな。

「そっか。だったら、一緒に頑張ろうぜ」
「え……？」

あれ？何でそこで疑問符をつけるのかな？
「おいおい、『一緒に』頑張るって言っただろ？俺もスクライアも、一緒に頑張るからさ」
「そうだよなのは！僕も頑張るから！！」
『主、高町嬢、ユーノ、まさか私やレイジングハートをお忘れですか』
『Ｍａｓｔｅｒ，ｐｌｅａｓｅ　ｄｏｎ'ｔ　ｆｏｒｇｅｔ　ｍｅ．』（マスター、忘れないでください）
「みんな……」

俺が言うのもなんだが、人も獣も機械も、お人好しな奴等が集まったもんだ。

「みんな……ありがとう！！」
ま、高町が笑えるようになったなら、そんな集まりも悪くないかもな。

後悔の先へ（後書き）

この話を書いてたら、灯火となのはが小学生とは思えなくなってしまった。

お前ら、何歳だよ！？

ちょっとやり過ぎちゃいました。

お茶会に事件は付き物！？（前書き）

ある方への感想への返信で、「オリキャラが灯火一人じゃ寂しい」と書いた自分ですが、

灯火の姉である燐火さん忘れてたぁーー！！

一応あの人もレギュラーなのに……

お茶会に事件は付き物！？

「相変わらず月村の家はでっけぇなぁ。俺の家何軒入るんだよ、この敷地に」
「ホントだよねー」

あの高町の誓いから数日。
俺と高町、ついでにスクライアは月村邸の前にいた。
何でいるかって言えば、月村がお茶会に来ないかと誘ってきで、それを快諾したからだ。

あの日から、高町と一緒に朝早くから魔法の訓練をしたり、授業中もマルチタスクを用いて、授業を聞きながらテンが組み上げたトレーニングプログラム（イメージトレーニングをもっと突き詰めた物。実際は違うらしいが、ありたいていに言ってしまったらそんなものらしい。）をこなしたりで、普段よりへとへとだった俺は、体と精神を休めるのにちょうどいいと考えたからだ。
で、学校が終わって一旦家に帰り、たまたま家にかえって来ていた姉さんにその旨を伝えたあと、準備を終え高町と合流。
そして今に至ると言うわけだ。

「なぁ知ってるか高町。月村の奴、家をもうちょいでかくしたいーなんて言ってたんだぜ？猫が増えたからだってさ。今でも十分だと思うんだが」
「あははは……」

まったく、金持ちの考えは俺みたいな庶民にはわからんね。
ここで黙ってても入れる訳じゃないので、門の脇にあるインターホンをポチッとな。

『はい、どちら様でしょうか？』

インターホンを押すと、何時ものようにノエルさんと言う月村家のメイドさんが応対してくる。

で、こっからがすげぇところ。

「あ、金木と高町です。今日はお茶会に誘われて来ました」

「お久しぶりです、ノエルさん」

『少々お待ちください……どちらも声紋認証を確認しました。それでは、門を開けますので、少し離れていてください』

そう、この声紋認証がすげぇのだ。

普通の家じゃまずお目にかかれんよなぁ。

と、そんな事を考えている間にごごごっと音を立てて門が開いていく。

門が開けばすぐさまお邪魔します、と言うわけには行かない。

こっからさらに月村邸の玄関ドアまで長い距離があるのだ。

「俺は日本の土地が足りないって、実は嘘なんじゃないかって思うんだよな、月村とバニングスの家にくる度」

『なのはに話は聞いてたけど、ホントに広いね。アリサって子の家もこれくらい広い敷地を持ってるの？』

高町の肩の上にいるスクライアが驚いたような声で念話を飛ばしてくる。

それに俺は『その通りだ』と念話を返しておいた。

あのあと、俺たちを迎えに来たノエルさんと共に、月村邸内部へ。
そして月村と、既に来ていたバニングスの二人と合流し、お茶会と洒落こんだ。

「……ふいー、銘柄とかは分からないけど、相変わらず紅茶ウマー」
「ふふふ、灯火君、おかわりはいる？」
「じゃ、もう一杯貰おうかな」

月村の問いにそう答えると、月村の背後で控えていたノエルさんがススス……と接近してきた。

「失礼します」
「あ、どうも」

そして、俺のティーカップにトクトクと紅茶のおかわりを注いでいく。

おかわりを貰い、ティーカップを傾け一口飲む。
バニングスは高町と猫を愛でており、スクライアは猫に追いかけ回されている。

ジュエルシードを追いかけ回す日々を送る俺は、そんな穏やかな時間に大いに癒されていた。

『なのは！灯火！どっちでもいいから助けてーー！』

スクライアからはそんな念話が飛んで来たが、見てて面白いからそのままにしておいた。
高町も俺と同じ考えらしい。

バニングスと一緒にその光景を見ていた。

ただバニングスよ、いいとこのお嬢様がゲラゲラ笑うのはいかがなものか？

お茶会も一段落し、その様相をゲーム大会に変えていた。

やってるゲームは相手を場外にスマッシュで吹き飛ばすゲームだ。

高町はチャージビームが特徴のバウンティハンターを使い、バニングスは二足歩行の狐を使っている。

俺と月村は早々に残機ゼロにされ、見学組だ。

二人の対戦を見ていると、スクライアが肩に上ってきて、念話を飛ばしてきた。

『灯火、ジュエルシードを見つけたよ。場所はすごく近い……多分敷地内だ』

『……なんだって？』

和んで緩んでいた表情を引き締める。

ついで高町に念話。

『高町、敷地内でジュエルシードが見つかったみたいだ』

俺の念話に高町が俺の方を向く。

……向くのはいいんだが、まずはその手に握ったW○iリモコンを離しなさい。

「む！？隙ありよ！」

高町がこちらを向いたのを見て、バニングスがここぞとばかりに攻めようとする。

が、高町は俺の方を見たままリモコンを操作。
哀れ、フルチャージのビームを叩き込まれた狐は場外へと吹き飛ばされた。
そして、バニングスのキャラの残機はゼロとなった。

「うがーっ！！もうちょっとだったのにぃ！！」

そんなバニングスの叫びを聞き流し、俺達はどうやってこの場を抜け出すかを念話で話し合っていた。

話し合いに気をとられ、月村がこちらを見ている事に気がつかずに。

お茶会に事件は付き物！？（後書き）

次回はとうとうフェイトさん登場の巻。

どうでもいいですが、私はフェイトさんが大好きです。

好きだから出番を融通するとは限りませんが。

ネコと魔石と金色少女（前書き）

フェイトさん、どうしてA' sまでは内気な性格だったのに、それに反比例するようなデザインのバリアジャケットを着ていたんだろうか？

『……と言うわけだ、スクライア。頼んだ』
『うん、まかせて』

ざっと話し合った結果、スクライアが急に脱走、高町がそれを追跡。しばらく経った後に俺が高町を心配して一人と一匹を追いかけ、合流後ジュエルシードを封印という運びになった。

『……むー』

が、どうやら高町はお気に召さなかったようだ。

『高町、これが一番ベスト……ってわけじゃないが、他の考えよかベターななんだ、納得してくれ』
『それはわかるけど……』

だったら一体何がお気に召さないのか？
そう問うと、高町はこういい放った。

『灯火君が私を追いかけるための理由が納得いかないの！！』
『あぁ、「運動神経がアレな高町が心配だから」ってあれか？』
『そう！』

んな事言ってもなぁ……

『お前さん、実際運動神経切れてると思われるくらい苦手じゃねぇか、運動』
『この前灯火と訓練してたとき、何もない所で転んでたよね』

『二人ともひどいよっ！？』

俺どころかスクライアにまで言われ、なまじ自分でも自覚しているせいか、それ以上反論はなかった。
が、相当堪えたようで、かなり凹んでいる。

『……仕方ないとはいえ、かなり罪悪感……なんていってる余裕はないか。次はどうやってスクライアを部屋の外へ出すか……』
そこまで考えた所で、部屋の扉が開き、エルさんとは別のメイドさんがお菓子を持って入ってきた。
彼女は月村家のもう一人のメイド、ファリンさんだ。

『お、ファリンさんナイスタイミング！スクライア、今だ！』

俺の号令と共に、スクライアが俺の肩から降り、扉へ向かってまっしぐらに走る。

「みなさん、お菓子のおかわりをお持ちしましたってっとっ！？」

それに驚いたファリンさんは、当然バランスを崩し、そのまま倒れそうになる。
が、そこは何とか持ちこたえたらしく、体勢を立て直した。

「あっ、こらユーノ君！？すみませんファリンさん、大丈夫でしたか？」

「は、はい～、何とか大丈夫です」
「ほんとすみません。ところで、ユーノ君どこ行ったんだろ？ちょっと探してくるね？」

高町がファリンさんに謝罪をしたあと、怪しまれないように理由をつけて部屋をあとにする。
バニングス達が止めたが、それを聞く前に高町は部屋をでて行った。

「んじゃ、行きますかね」
「どこ行くのよ灯火？」

バニングスにそう聞かれるが、その問いへの答えは用意してあるぜ！

「高町は運動神経やばいからな。心配だし、行ってくるぜ」

そう言って俺も部屋を飛び出した。
後ろからバニングスの声が聞こえたが、なんと言ってるかは分からなかった。
玄関で待ってた高町、スクライアと合流し、スクライア先導のもと、ジュエルシードの反応がある場所へ向かう。

「この辺りだ！」
「おいおい、マジで敷地内かよ、厄介事にならなきゃいいが」

俺がそう呟くと同時に、強い光が奥から放たれる。
その光は、やがて巨大ななにかを形作り、光が消えた後には、

『ニャァァァァ！』
「「「……はぁ！？」」」

でっかい子猫がいた。

うん、でっかいんだ、子猫のくせに。
しかもそのデカさときたら、周りにある樹木よりもでかい。

「……なに、あれ」
「えっと、あの猫の大きくなりたいって言う願いを、ジュエルシードが正しく叶えた……のかな？」
「いや、正しくない、何一つ正しくない。突っ込みどころしかないし」

俺たちが予想外の出来事に頭を抱えているのを尻目に、でかい子猫はニャアニャア鳴きながら楽しそうに辺りを見回したり、ドシンドシン歩き回ったり。

「……襲ってきたりはしないな」
「いままでみたいに暴走してない、安定して発動してる状態だからかな……？」
「でも、このままにしておけないよ、すずかちゃんが困っちゃうし」

それもそうだ。
いくら月村が金持ちだとしても、このでかい子猫を養うのは骨が折れるだろう。
下手したら比喩なしに骨を折られるかもしれんしな、じゃれつかれて。
いつもみたいに暴れてないので、高町の魔力弾一発で軽く気絶させてから封印することにした。

「今回も俺の出番はなしかな？」

そう安堵していた時だった。

『主、後方から魔力弾です！』
「なっ！？」

テンの報告に後ろを向くと、黄色く光る、鏃のように尖った魔力弾が飛んで来ていた。

「ちぃ！！」

テンをすぐさま起動し、防御魔法を展開する。
が、魔力弾の速度があまりにも速い。

「間に合わねぇ！？」

俺は被弾を覚悟した。
しかし、魔力弾は俺の横を通り過ぎていく。

（外れた？遠くからの攻撃は苦手なのか？）

当然、俺はそう考えた。
が、実際はそうじゃなかったのだ。

『ニャァァァァ！？』

「猫さん！？」

あのでかい子猫の悲鳴の用な鳴き声と、高町の叫びに振り向く。
そこには、先ほどの魔力弾を受けて気絶したと思われる子猫と、オロオロした高町がいた。

「外したんじゃ無くて最初から猫目当てかよ！！」

いや、魔導師という事はジュエルシード狙いか！！

魔力弾が飛んで来た方向を睨み付ける。
睨み付けた方向にある電信柱の一本に、そいつはいた。

金色の長い髪を二つ結いにし、髪と肌以外はほぼ黒一色という出で立ちの、儚い印象を持たせる少女。
その手に持つのは、少女の印象とは正反対にゴツく、存在感を溢れさせる戦斧。
「アイツか……」

俺が睨んでることに気が付いたのか、少女はふわりとその場から浮き上がり、こちらへ向かってきた。
と同時にその姿はふっと掻き消えた。

「なっ！？」
「……同型のインテリジェントデバイスを使う魔導師に、見たことがないタイプのデバイスを使う魔導師、そして使い魔……私と同じジュエルシードの回収を？」

見失った事で周りを見渡していると、高町の物でない少女の声が聞こえた。
声が聞こえて来たのは……俺の前にある木の上だった。
少女がいた電信柱からはかなり距離があると言うのに、まさかほぼ一瞬で……？

『恐るべき速さです。ご注意ください』

テンに言われて気を引き締める。
戦いにおいて速さはかなり重要な要素だ。
昔、誰かさんも言ってたはずだ、「兵は神速を尊ぶ」と。

少女が手に持った戦斧を構える。

「ジュエルシード、いただいていきます！」

そして、再び姿が消失。
次に姿を現したのは……俺の背後。

ガキィン！

それに何とか反応した俺が振るうアイゼンメテオール形態のテンと、
少女の戦斧がぶつかり合い、それが戦いの始まりを知らせるゴング
代わりとなった。

ネコと魔石と金色少女（後書き）

そろそろ灯火の姉の出番をどうにかして融通したいなぁ……

明らかな敗北（前書き）

いつもより多少短いかもです。

それでは、どうぞ

明らかな敗北

「っらぁ！！」

少女に向かってテンを振るう。
が、やはりそれはひらりと避けられ、お返しとばかりに戦斧を振ってくる。

『Ｓｃｙｔｈｅ　ｆｏｒｍ』
「アーク……セイバー！」

テンとぶつかり合ったら直ぐ様距離をはなし、戦斧を鎌に変形させ、距離があるにも関わらずそれを大振りする。
すると、鎌の刃が回転しながら此方へと迫ってくる。
軽い誘導性があるそれをなんとかかわす。

「くそっ！速すぎる！？」
『防御力を犠牲に速さを極めたといった所でしょうね』
「つか、犠牲にし過ぎだろあれ」

少女の格好は……言ってしまえば水着にマントとかつけた感じか？
明らかに露出過多だ。
正直、目のやり場に困る。

そんな俺の心情なぞお構いなしに、向こうの攻撃は鋭さを増していく。

「反応するのがやっとで反撃できねぇ！！」
『ならば、向こうから仕掛けてきた時に反撃すればいいのでは？そ

れに最適な形態は、既に使えますよ』

「……そうか！」

テンのアドバイスに、俺は少女を追いかけるように動くのをやめ、待ちの姿勢になる。

俺の動きの変化に、少女は怪訝な表情を見せるが、すぐさま表情を戻し、こちらに斬りかかってくる。

今までのように、それをテンで受け止める。

今までだったら、再び距離をとられていたが、今度ばかりはそうは行かない。

今回、少女の鎌を受け止めたのは鈍い銀で幅広の刃ではなく、橙色でやや細身の刃。

刃に込められた術式が発動し、距離を離そうとする少女に爆発という形で襲いかかった。

「っあ！？」

まさかこのような反撃方法をとられるとは思ってなかったのだろう。

爆発をモロに受けた少女はふらつき、それでも距離を離した。

「ったく、ようやっとまともな当たりをくれてやったな」

「……」

少女はこちらを睨み付けるが、今までのように斬りかかってはこない。

やはり、エクスプロージョンでの一撃は軽いものではなかったらしい。

ならば幸いと、今のうちに聞きたいことを聞き出す事にする。

「さてと……いきなり襲いかかってくるったぁどういう了見だよ？あぶねぇだろうが」
「……あなたたちもジュエルシードを集めている。だったらあなたたちは私の敵だ」
「そりゃごもっともで。けど、何でったってこんな危険物を集めてんだ？ありゃスクライアが発掘した物、つまり今のところスクライアの物だぜ？」
「……あなたには関係ない」
俺の質問にポツポツと答えていくが、最後の質問だけはバッサリ切り捨てられた。
だいぶ立て直したのか、再びデバイスを構える少女。
「あー、くそ！話し合いでなんとか出来るかなとか思ってたのにな……！」
「言葉だけじゃ……何も伝わらない……何も変わらない！」
そう叫ぶと同時に、少女が動く。
しかし、それは俺に向かってくる動きではなく……
「っ！？高町！逃げろぉぉぉぉ！！」
「……え？」
今まで蚊帳の外にいた高町を狙うための動きだった。
突然の事で、高町は少女に対処することが出来ない。
「……ごめんね」

そして、高町は金色の刃に切り裂かれた。

「……あ」

「高町ぃいいい

猫は黄色の魔力に貫かれ、光を放ち小さくなっていく。
あとに残ったのは本来のサイズに戻った子猫と、子猫から引き剥がされたジュエルシード。

そのジュエルシードも、少女のデバイスの先にある黄色い宝石部分に吸い込まれた。

その様子を見届けた少女は、ちらりとこちらを見やり、すぐ目を離し、そのまま何も言わずに立ち去っていった。

「……今回は俺達の負け……か、クソッタレ……っ！」

高町は気絶させられ、ジュエルシードは持っていかれた。
これは明らかに俺達の負けだ。

その事に対する苛立ちを含んだ声は、スクライア以外に聞かれることはなかった。

明らかな敗北（後書き）

アニメと違い、フェイトと戦ったのは灯火なので、なのははジュエルシードを奪われませんでした。

そこに違和感を感じるかも知れませんが、灯火という存在がもたらした変化だと言うことで。

ある少女が抱いた決意（前書き）

賛否両論どころか、批判しかないだろう話になりました。

かなりな超展開となっておりますが、よろしければどうぞ

ある少女が抱いた決意

あの後、俺は気絶した高町を背負って屋敷に戻った。

「お帰り……って、なのは!?一体どうしたってのよ!?」

「落ち着けバニングス。スクラ……ユーノを探している途中で躓いて頭うって気絶してるだけだ」

もちろんバニングスに何があったか問い質されたが、俺はそう答えることしか出来なかった。

とにかく、高町を横にさせたいからと、バニングスの追究を遮り、月村にベッドのある部屋に案内してもらった。

案内されたのは月村の自室。

高町はその部屋のベッドに下ろした。

その後、しばらく経っても高町は目覚めず、時間も遅くなってしまったので、バニングスは帰っていった。

バニングス自身は高町が起きるまで残りたがってたが、あまり遅くなったらバニングスの両親が心配する。

そう言って、なんとか帰ってもらった。

「……何があったか、今度きっちり聞かせてもらうわよ?」

帰り際にバニングスに耳元でそう言われた。

やはり、何があったかまでは分からなくとも、何かが起こったのだと言うことには感づいているようだ。

そしてその起こった何かは、決して俺がさっき言った通りではない

と言うことにも気付いている。

バニングスは聡明だ。
やはり、隠し通すのは無理だったか……。
現在、月村の部屋にいるのは俺、月村、スクライア、そして未だに目が覚めない高町。
どうせ今日は姉さんは帰ってこないし、高町が起きるまでは残っていようと思って、俺はまだ残っている。

誰も言葉を発することなく、ただカチカチと時計の針が動く音だけがいやに響く。

「……ねえ、灯火君」

そんな沈黙を破ったのは、月村だった。

「お願い、本当の事を教えて？……なのはちゃんに何があったの？」

月村が真剣な眼差しを向けてくる。
でも、真実を教える訳にはいかない。
巻き込む訳にはいかないのだ。

「何があったって……バニングスにも言っただろ？高町が躓いて頭をうって……」

だから俺は誤魔化す。
しかし、次いで月村が放った言葉に、俺は驚く事となった。

「……ジュエルシード」

「っ！？」

月村の言葉に、俺は月村に驚いた表情をむける。
そんな俺の様子を見て、月村は「やっぱり……」と呟いた。

「なのはちゃんがこうなっちゃったのって、そのジュエルシードっていう物が関係してるの？」
「月村……その名前をどこで……？」
「なのはちゃんがユーノ君を追い掛ける前に」

ユーノを追い掛ける前……
その時は、俺は念話で話していたはずだ。
つまり、月村は念話が聞こえた……？
『おいスクライア、どうなってんだよ！？なんで月村が念話の内容を聞いてるんだよ！？』
『僕に言われてもわからないよ！』

スクライアも何が起こったのか分からないようだ。
その月村は、俺の方をじっと見ていて、やがて口を開いた。

「灯火君、スクライアって誰？あのときもそのスクライアって人と話してたみたいだけど」
「……」

今ので完璧に理解せざるを得なかった。
月村は魔力持ちだと。
そして、ここまで聞かれてしまっているなら、もはや隠し通すのは不可能だと。

俺ははぁ……とため息を一つつき、そして決めた。

「スクライア、こいつはもう隠し通すのは無理だ。話すしかないぜ」
「……そうみたいだね。出来ればこのまま隠し通せたらよかったんだけど……」
「え!?フェレットがしゃべった!?」

急に喋りだしたスクライアに、さすがに驚いたらしい。
そんな月村の様子をみて、スクライアはペコリと頭を下げて言う。

「……はじめまして……って言うのもちょっとおかしいかな?まぁ、それは置いといて……ユーノ・スクライアと言います」

そこで一旦言葉を切り、そして表情を意を決したような表情に変えて、続きを言う。

「……そして、高町なのはと金木灯火の二人を危険な事に巻き込んだ張本人です」
それからスクライアは月村にすべてを話した。
次元世界の事、ロストロギアの事、魔法の事。
そして、自分が何故この世界に来たのかと言う事。
途中、魔法の事を話した際には、月村も魔法を使える素質があると言うことも説明した。

「と言う訳です。……責任は僕にあります。二人を巻き込んだと言う責任も、今回なのはがこんな事になってしまったのも、全部元を辿れば僕の責任なんです」

月村は、そう言い切ったスクライアを見ていた。
睨み付けるでもなく、軽蔑の視線を向けるでもなく、ただ見つめていた。

そして、たっぷり沈黙を保った後、こんな事を言ってきた。

「ねぇ、ユーノ君……私にも何か手伝えないかな？」

「……え？」

月村の言葉に、俺もスクライアも驚く事しか出来ない。

「えっと、さっきの話だと、私にも魔法が使えるんだよね？だったら、私も手伝えるんじゃないかなぁって思って」

「いやいや、月村さんや、さっきの話聞いてた？すっごい危険なんだぜ？今回の高町みたいな事じゃ済まないかもしれねぇし」

「でも、そんな危険な事を灯火君たちはやってるんだよね？」

「うぐぅ……」

それを言われちゃ反論できん。

「今の話を聞いちゃったら、もう知らんぷりなんてできないよ……ねぇ、お願い、私にも手伝わせて？」

「んな事言われてもなぁ……俺としちゃあ月村には踏みこんで欲しくない領域だし、第一、デバイスないしなぁ」

「デバイス？」

月村の疑問に、俺は首にいつもかけているネックレスを外して、月村の方へ差し出す。

「これが俺のデバイス、テン・コマンドメンツ、通称テンだ」

『こうして話すのは初めてですね？ご紹介にあずかりましたテン・コマンドメンツです』

「ネックレスがしゃべった……けど、さっきユーノ君がしゃべったのもあるし、あまり驚かないかな？」

「まぁそれは置いといて、デバイスってのは言ってみれば魔法使いの杖みたいなもんで、俺達の魔法の発動をサポートしてくれるんだ」
「へぇ……」
月村は興味深そうにテンを摘まみ、下から覗いてみたり、ひっくり返したりしている。
「まぁそんなもんで、正直デバイスないなら危なさ倍プッシュだから、思い留まってくれないかなぁって思ってみたり」
「うーん……お姉ちゃんなら完全オリジナルは無理でも、複製する位だったらなんとかしちゃうかなぁ……？」
「……はい？」
「ちょっとテンさんを借りていい？お姉ちゃんに見せて来るね？」
月村の衝撃発言に固まっていると、月村はテンを持ったままスタスタと部屋を出て行ってしまった。
いろいろ言いたいことはあるが、これだけは言わせてくれ。
「……だめだ、手伝う気マンマンだこりゃ」

ある少女が抱いた決意（後書き）

忍さんはマッドが頭につく科学者。
異論は常時受け付けております。

次回も超展開が続くと思います。

夜と魔法が交わるとき（前書き）

だめだ……

どうしても、自分でキリがいいかなってところで話を区切ると短くなってしまう

要修練ですかね。

夜と魔法が交わるとき

ｓｉｄｅ　すずか

私はお姉ちゃんの部屋のドアをバンッと勢いよく開けた。

「お姉ちゃん！！」

「うぉわお！？す、すずか！？びっくりさせないでよねー。で、どうしたの？ずいぶん興奮ぎみというか、なんと言うかだけれど？」

お姉ちゃんは、手に持っていたティーカップをテーブルに置き、こちらを見る。

私はそれに答えず、テーブルにテンさんを置いた。

「お姉ちゃん、これないしこれに準ずる物、作れる？」

私の言葉に、お姉ちゃんは怪訝な顔を見せ、テンさををつまみ上げた。

「これってネックレスよね？同じの買ってくればいいだけじゃ……」

『私みたいな物がそこかしこで売られてたら、正直驚きですよ』

ピタリ、とお姉ちゃんは動きを止める。

「……すずか、腹話術の練習？上手じゃない。声が変わるのがちょっと不思議だけど」

『生憎と、私はすずか嬢ではなく、あなたが現在摘まんでいるネックレスですよ』

「……は？」

テンさんの言葉に、お姉ちゃんは自分が摘まんでいるネックレスを見る。

すると、テンさんがピカピカ光り、やがてお姉ちゃんの指からフワリと浮いて抜け出した。

「……え？ちょ、なにこれ。マジックショー？」

『当たらずも遠からずですね。確かに、今私はマジックにより浮いています。ただし、手品の意ではなく、魔法の意の方のマジックですが』

あまりに現実離れした光景に、さすがのお姉ちゃんも呆然とするしかないみたい。

「お姉ちゃん、もう一度聞くよ？」

私の声に、お姉ちゃんはギギギ、と錆びた機械のような動きでこちらを向く。

「これ……テン・コマンドメンツないし、これに準ずる物、お姉ちゃんは作れる？」

お姉ちゃんはたっぷりと黙りこんだあと、口を開いた。

「……とりあえず、私にも分かるように事情説明プリーズ」

私は、さっき灯火君とユーノ君に聞いたことをお姉ちゃんに話した。

最初は何を言っているのやらという表情（これは呆れの意味というより、話の内容が突飛すぎてついていけないという意味が大きい）を見せたが、魔法とロストロギアの話には瞳を輝かせて食いついて

きた。

「……それでね？なのはちゃんと灯火君はユーノ君を手伝って戦ってるの。私は、それを手伝いたい……だから……」

「……正直、私は反対かなぁ」

お姉ちゃんの反応に、仕方ないかと思う。

けど、私はもう知ってしまった。見て見ぬフリなんか出来ない。

そんな事を思っている私を見て、お姉ちゃんはクスリと笑った。

「すずか、人の話は最後まで聞きなさい？」

「……え？」

「確かに、私は反対したいわ。あなたがやりたいって言ってるのは、とても危険な事なんだしね」

でも、とお姉ちゃんは一旦言葉を切り、そして続けた。

「私が何年すずかの姉をやってると思ってる？あなたが一度やるって決めた事は絶対やり抜く子だって、私はとっくに知ってるわよ？」

「お姉ちゃん……」

「そして、友達を決して放っておけない優しい子だって事も知ってる」

だから、とお姉ちゃんは言葉を続ける。

「良いわよ。月村の総力をもって、ジュエルシードだっけ？それの捜索、協力しようじゃないの」

ーーーただし、絶対無事に終わらせる事。いい？

最後にお姉ちゃんはそう締め括った。

「うん……うん！」

お姉ちゃん……ほんとは無理にでも止めたいんだろうな。

でも、今回ばかりは、止めようとしても私は止まらないから、だから協力してくれるんだ。

……ありがとう、お姉ちゃん。

「あー、そう言うわけでノエル。聞いてたでしょ？」

「ええ、最初から最後まで聞かせていただきました」

「私も聞かせていただきましたよ！すずかお嬢様、私も微力ながらお手伝いさせていただきます！」

お姉ちゃんが扉へ声をかけると、扉を開けてノエルとファリンが入ってくる。

「んじゃ、ノエルたちは私のラボの準備をしておいて？すずか、灯火君とユーノ君……あと、起きてたらなのはちゃんをここに連れてきてくれる？」

「うん、わかった！」

私はお姉ちゃんにそう言われ、部屋へと向かって駆け出した。

『……大変ですね、姉君殿』

「ま、大変な事は慣れっこよ」

部屋で、お姉ちゃんとテンさんがそんな会話をしていたのも知らずに。

side out

「……つー訳で、月村には魔法の事はばれちまった。バニングスもかなり怪しがってる。ありゃ何かやってるって事には感づいたな」

「そっかー……バレちゃったんだね」

現在俺は、月村がテンを持って出ていった直後に目が覚めた高町に事情を説明しているところだった。

俺の説明に、高町はさして驚いた風もない。

当然、俺はそんな高町の様子に違和感を覚えるわけで。

「なんか、ずいぶんあっさりした反応だな？もうちょっと驚いたり、慌てたりするかと」

「うん……えっと、一応驚いたりとかはしてるんだよ？でも、なんて言うか……すずかちゃんにだけでも隠し事しないですんだって事に……安心した、のかな？そんな感じなんだ」

「なるほどな」

まぁ高町が言いたいことはよく分かる。

なるだけ隠し事ってのはしたくないもんな。

隠し事を隠すために嘘をついて、その嘘を隠すためにまた嘘をついてと、無限ループになっちまうのもそうだが、単純に隠し事をしてる後ろめたさは辛いものがある。

「……アリサちゃんにも、その内ちゃんと言わなきゃね」

「……だな」

でも、言ったら「私にだけ隠し事！？あんたら、私をなめてるの！？ふっざけんじゃないわよ！！」とか言って、俺にだけ殴りかかっ

て来そうだ。
うん、俺にだけ。
……あながち当たりそうな未来を予想し、軽く凹んだのは内緒だぜ？
「灯火君、なのはちゃん起きた？」
そんな事を考えていると、月村が帰ってきたようだ。
「おぉ、起きたぜ」
「そっか、よかった……なかなか起きないから心配したんだよ？私もアリサちゃんも。アリサちゃんは時間が遅くなったから帰ったけど、はじめは『私も起きるまで残る！』って言ってて」
そういやそんなこと言ってたっけなぁ、バニングス。
「にゃはは、ごめんなさい」
その様子を思い浮かべたのか、高町がやや苦笑いしながら謝罪する。
「ところで月村、話はどうなったんだ？」
月村が帰ってきたと言うことは、忍さんとの話は一応終わったと言うことだ。
俺の質問に、月村はにっこりと微笑み、
「月村の総力をもってサポートしてくれるって！」
そう答えた。

「あ、その事でお姉ちゃんが話があるみたい。お姉ちゃんが二人を呼んできてくれって。なのはちゃん、歩ける？」
「あ、うん。大丈夫だよ」

ベッド脇の棚に置かれていたレイジングハートを首にかけ、高町がベッドから降りる。

多少ふらついたが、そこは俺が支えたので、倒れるなんて事にはならなかった。

「んじゃ、あまり待たせるのも失礼だし、さっさと行こうぜ」

まだ起きたばかりの高町の事を考え、ややゆっくり目のスピードで、俺たちは忍さんの所へ向かう月村を追いかけた。

夜と魔法が交わるとき（後書き）

はい、と言うわけですずかさん参戦確定しました。

デバイスはベルカ式のを考えています。

月村の科学力、おかしいだろ？（前書き）

いいタイトルが思いつかなかった……

それではどうぞ。

途中ふらつく高町を支えながら月村についていくと、忍さんの部屋にたどり着いた。

「お姉ちゃん？灯火君となのはちゃん連れてきたよ」
「分かったわ、入ってちょうだい」

月村が忍さんの言葉に従い、扉を開け、中に入る。
俺達もそれにならって部屋の中に入った。

「いらっしゃい、話は妹から聞いたわよ？二人とも随分な厄介事に巻き込まれてるわねぇ」

俺と高町をを見て、忍はしみじみと言う。
そして、俺の肩に乗っているスクライアをやや鋭い視線で見やる。

「そしてはじめまして、異邦の方。私は月村忍。あなたに乗っかられている灯火君の隣にいる、月村すずかの姉よ」
「は、はじめまして……」

忍さんの視線の厳しさに、若干どもりながらも応対するスクライア。
つか忍さん、スクライアに厳しい視線を向けるともれなく俺にその視線を向けられている錯覚に陥るんで、その、なんと言うか、勘弁してください？

「お姉ちゃん、そんなに睨んじゃったら話が進まないよ」

そんな様子を見かねたのか、月村が忍さんをたしなめる。

それでも忍さんはしばらくスクライアを睨んでいたが、やがてふぅ、とため息をついて視線を緩めた。

「……確かに、もういいかしら。流石に友人の弟と妹、終いには私の妹を巻き込んでくれちゃったから、これぐらいはやらせてもらいたいわね」

「すみません……」

忍さんの言葉に、スクライアがうつむきながら答える。

俺としてはスクライアを弁護したいが、下手な事を言ったら余計スクライアの立場が悪くなる気がするので、黙っている。

「まぁ、私も協力するって言っちゃったし、やれるだけの事はやるつもりよ。話に聞くと、かなりヤバイ代物らしいじゃない、その……ジュエルシード？ってやつは」

実物をちょっと見せてくれる？と言われたので、スクライアに大丈夫か聞いてみる。

「封印処理はしてあるから、へたに衝撃を与えなければ大丈夫だとは思うよ」

「ああ、その点はたぶん大丈夫。ただどんな物か眺めるだけだから」

ならばと高町に目配せする。

意図を察した高町は、レイジングハートからジュエルシードを一個とりだし、忍さんに渡す。

……レイジングハートが物体を出す様を見て、忍さんの目がキラリンと輝いた気がした。

「……やっぱ興味深いわね。こりゃ久々に腕かなるわ～」

ああ、分かっちゃいたけど、改めて。

忍さん、あんたは頭にマッドがつく科学者ですよ。

「とまぁ、それは後の楽しみとしときましょうか。さてさて……ふーん、これがジュエルシード、ねぇ……」

忍さんは摘まんだジュエルシードをひっくり返したり、光にかざして見たりいている。

……？今、忍さんの目が赤くなったような……？

そう思って、改めて見ても、いつもの忍さんの目の色だ。

（……気のせい……だよな？）

「……これは」

そんな俺の心の内なぞ分からない忍さんは、しばらくジュエルシードを眺め、やがて高町にジュエルシードを返した。

「……うん、よく分からないけど、イヤ～な感じはひしひしとしてたわね、これ。背筋が凍るように冷たくなったわ」

「ヤバイものって話も頷けるわねぇ」と軽く言葉を続けているが、その表情は硬いままだ。

「……あ～やめやめ、暗い顔はやめましょ！と言うわけで、話を変えるけど、灯火君となのはちゃん、二人のデバイスをちょっち解析

させて欲しいかなぁって思うんだけど」

暗い顔に付随する空気に耐えかねたのか、忍さんが表情を一転させてそう聞いてくる。

「えっと……それを元にすずかちゃんのデバイスを作るんですよね？」

「そ。それとテン・コマンドメンツ……あぁ、テンちゃんって呼ばせてもらうから以後それで……の話だと、どうやら灯火君となのはちゃんの使ってる魔法、それぞれ違うらしいのよ。その差異も調べたいなって思ってね」

俺と高町の魔法は違う？

確かに俺が魔法使うときと、高町が使うときは出てくる魔力テンプレートの形が違うが……

そういや、そこら辺の話はテンに聞くの忘れてたな。

『高町嬢の魔法体系は、例外はありますが、中～遠距離で真価を発揮します。反対に主の魔法体系は、これまた例外はありますが近距離特化型。遠距離魔法は得意分野ではありませんね』

「だから俺は高町みたいの極太ビームとかは使えないのか」

『そうなります』

「と言うわけらしくて、一応どっちもデータ取って、その中で再現できる範囲でやってみようってなったの。完全に再現は無理だろうし」

そう言うことか。

「あれ？忍さん、今までテンと話してたんですよね？データとか、もう貰ってたりしてないんですか？」

「あぁ、なんか構造とかのデータは管理者権限で許可貰わないと開

示出来ないんだって」
「はぁ……」

まぁ、断る理由は欠片もないな。
俺はテンに情報を開示するように言う。
これだけでいいらしい。

「ありがとね？それじゃ、ここじゃデータは見れないし、ラボ行きますか」

そう言って、忍さんはなぜか本棚の方へ向かう。
……って本棚？

「……なぁ月村さんよぅ。もしかして、本棚の裏に隠し通路とかあったりするのか？」
「うん、そうだけど」

なぜそんな当たり前の事を聞いてるんだろう？という至極不思議そうな表情を返された。

「いや、んな当たり前な事を聞かないでって感じで返してきたけど、普通は隠し通路なんか作らないからな？」
「えっ！？」

おい、なんで高町が反応すんだよ？

「だって！私の家にもあるよ！？隠し通路」
「マジで！？」
「アリサがちゃんの家にもあるみたいだよ？」
「えー……」

あれ？俺がおかしいの？
この中で異常なのは月村たちじゃなくて俺なのか？

余談だが、今からそう遠くない未来、自分の家に隠し通路が目じゃないくらいの物があると発覚するのだが、それは今は関係無いことである。

「ちょっとー、この通路はなるべく表にさらしておきたくないのよ。だから早くこっちに来てちょうだい」

忍さんの声に、俺たちはいそいそと隠し通路に入る。
全員入ったのを確認すると、忍さんは壁の一部をガコンと押し込む。
すると、本棚がスライドして通路を隠した。
それと同時に、壁につけられた照明が灯り、通路を明るくする。

「これでよし……っと、どうしたの？灯火君」
「いえ……なんでもないです」

もはや何も言いますまい。
それからは忍さんの先導のもと、長い通路を進んでいく。

やがて、長い通路は終わりを告げ、一つの扉に突き当たった。
忍さんはその扉の横についている機械を弄っている。
数字キーで番号を打ち込み、それを終えると数字キーの右にあった蓋がスライドしてまた別の機械が現れる。

その機械に人指し指を押し付けると、今度は数字キーの上にあった蓋がスライドする。
そして現れたカメラのような機械に覗きこむように視線を合わせる。

そこまでやり、大きなブザーがなって、やっと扉が開いた。

「暗証番号に、指紋認証、最後は網膜認証……映画ではよくみるけど、現実にあるとは……」

「あ、二つ目は指紋認証じゃなくて静脈認証よ」

どっちにしろ一般人はまずお目にかかれない代物にはかわりありませんよ、忍さん。

開いた扉をくぐる忍さんに心でそんな突っ込みをしながら、忍さんについていく。

その先に広がっていた光景は……

「うわぁ……」

高町が驚きに声をあげる。

俺は驚きすぎて声すら出なかった。

スクライアも俺と同じ様子だ。

見回す限り機械が設置されている。

何に使うのかは分からないが、すごいものに違いはないだろう。

忍さんはそんな俺たちの様子を見て、ニンマリと笑みを浮かべながら言った。

「ようこそ、月村のラボへ。歓迎するわ、魔導師諸君」

月村の科学力、おかしいだろ？（後書き）

一度でいいから指紋認証装置とかが設置されている家を実際に見てみたい筆者であった。

すずかのデバイス、いい名前が思いつかないなぁ

温泉旅行（前書き）

今回はやや展開が駆け足かもしれません。

では、どうぞ。

温泉旅行

それは、月村がジュエルシード集めを手伝うと宣言した日から二週間くらいたった日の事だった。
その話は、デバイスの制作度合を電話で報告してきた月村からのぽつりともれたものだった。

『……と言うわけで、あと一週間ぐらいで試作品ができるんだって』
「あと一週間か……なんか出来るのが早い気がするな」
『術式はユーノ君とかテンさんとかレイジングハートさんが手伝ってくれたから、だいぶ楽だったって。でも、変形機能どうしようってぼやいてたよ』
「まぁ、あれはなぁ」

俺自身、あれどんな理屈なのか分からんし。

『あ、そうだ。お姉ちゃんに聞いておいて言われてたんだ。今度の連休あいてるかな？皆で旅行はどうかなって』
「皆で旅行？」
『うん、今度の連休に行こうかって、お姉ちゃんと士郎さんたちが計画してね、なのはちゃんたちとアリサちゃんも一緒に行くんだよ。もしよかったら灯火君と燐火さんもどうかなぁって』

ふむ。実に魅力的な提案ではあるんだが……

「悪いな、珍しく姉さんが今度の連休に休めるんだ。だから一緒に小旅行に出掛けようって事になったんだよ」
『そっか……残念だな……』

そんな実に残念だって声を出されると、こちらとしても非常に罪悪感が募るんだが。

「やっぱ姉さんが珍しく休みだってなるとな、そっちを優先したい」

『そうだよね……燐火さん、いつもすごく忙しいみたいだし』

正直、子どもながらに我が姉は働きすぎなのではないかと思ってたりする。

（はぁ、早く自分で自分の食い扶持ぐらい稼げるくらいにはなりたい）

少しでも姉の負担を軽減させたいもんだ。

『……灯火君？どうしたの？』

「ん？あぁ、悪い。ちょいと考え事を。兎に角、折角だから温泉旅館に行って、ゆっくりしようかって話になったわけだ」

『あ、灯火君たちも温泉行くんだ？』

「月村たちも？」

『うん、海鳴温泉に行くんだよ』

海鳴温泉？

そこって……

「そこって、俺達も行く所だぜ？」

……なんか、作為的な物を感じるんだが……

「……お！あれが海鳴温泉か」

「わぁ、けっこうおっきいんだねぇ」

俺の言葉に、高町も窓の外を見て、件の旅館の大きさに感嘆の声をもらす。

ん？なんで高町が一緒にいるかって？
高町だけじゃなくて、月村もバニングスもいるぞ？
で、なんでいるかって言うと、それはあの後、月村が『目的地が一緒なら、一緒に行こうよ』と言い出したからだ。

もちろん、それだけじゃ一緒に行くなんてならなかっただろうな。
いきなり一緒の車に乗せてもらうとか、無理があるだろうから。
だが、月村の話を聞いてたのか、忍さんが

『別に構わないよ？むしろ一緒に行きましょうよ』

と鶴の一声。結果、金木姉弟はこうして車に乗せてもらっているわけ。

ちなみに、車は高町家と月村家から1台ずつでており、俺を含めた子ども組と桃子さんが、士郎さんが運転する高町家の車に乗っており、姉さんはノエルさんが乗ってる月村家の車に乗っている。

『ねぇ灯火。温泉ってどんなところなんだい？』
『ん？お前さんは温泉知らないのか？そうだなぁ……めちゃくちゃ広い風呂だな』

後、スクライアももちろん俺達と同じ車にいる。
先程までバニングスに愛でられていたはずだが、いつの間にか俺の肩に乗っかっている。

……いや、こりゃバニングスの魔の手から逃げてきたな。なんか、

バニングスの視線が怖いことになってるし。

『へぇ～。ちょっと楽しみかな』

まぁ、そこは指摘しないほうがスクライアのためか。

俺は旅館につくまでの間、スクライアの気分を害さない程度にスクライアをモフる事にした。

……バニングスの視線がめっちゃ怖かったです。

旅館についたら、まずはチェックインを済ませ、各々荷物を置こうという運びになったのだが……

「いやね、まさか予約してた部屋まで隣同士とか、明らかに作為的だろ」

と言う事だったわけだ。

ま、だから何だって話だけどな。

「灯火！さっさと温泉行くわよ！！」

バニングスが俺達が予約した部屋に入ってきて、そう急かしてくる。

先に行けばいいのに……なんて言わない。

言ったらアリサ・スペシャルなる技をかけられるだろうことが予想できるからだ。

ありゃ二度とくらいたくないね。

ってな訳で浴場前に来たわけだが、ここでまた一悶着。

「さぁユーノ、私たちがしっっっかり洗ってあげるわ！」
「キュッ！？キュ、キュー！！」

だいたい何があったか分かっただろ？
ユーノがバニングスに捕まり、女湯に連行されそうになっているのだ。

『灯火！た、助けて～！』

ほっといてもいいが、かわいそうになるくらい助けを求めてくるので、助けることにした。

ひょいっと横からスクライアを掴み、自分の肩に乗せる。

「あ、ちょっと！」

バニングスが何か言ってくるが、スルーして男湯の暖簾をくぐった。

「た、助かったよ、灯火。ありがとう」
「災難だったな。……いや、実は残念とか思ってたりするか？」
「し、しないよ！」

その割にはどもったけどな。
そこは武士の情けで指摘しないことにした。
「お、遅かったじゃないか、灯火君」
「士郎さんたちはもう入ってたんですね」

スクライアを肩に乗せ、浴場に入ると、士郎さんが手招きをしている。
洗い場もあいてるみたいだし、士郎さんの隣に陣取る事にした。

「あれ？恭也さんは？」
「ああ、一足先に浸かってるよ。ほら」
士郎さんが指差した方を見ると、確かに恭也さんがいた。
いつもはキリッとした顔つきも、心なしか弛んでいるように思う。
「まったく、一人でさっさと行きおってからに」
昔は俺の背中を流してくれたもんだ云々。
どうやら、おいてかれた事が寂しいらしい。
ならば、やるべき事は決まってるな。
「背中、流しますか？」
その言葉は劇的な効果を持っていた。
見るからに士郎さんの表情が嬉しそうだ。
「それじゃ、頼もうかな？」
と言うわけで士郎さんの背中を洗う。
……なんか、懐かしいな、こう言うの。
昔は父さん相手にこうやってたもんだ。
……俺の両親は、俺が以前いった通り、行方不明だ。小学校に入ってからしばらくたった後の事だった。
理由はわからない。
そもそもいきなりの事だったし、姉さんに聞いてもはぐらかされるからだ。

（あの様子じゃ、やっぱ姉さんは知ってるんだろうなぁ）

でも、俺は敢えて深く聞き出そうとはしないようにしてる。

その事を聞かれた姉さんが、すごく悲しそうだったから。

士郎さんの背中を流し、温泉に浸かってると、恭也さんがこちらに近づいてきた。

「すまないな、父さんが」

「？」

いきなり言われてなんの事だと思ったが、さっきの背中を流した事かと思い至る。

「いえ、あれは俺からやりましょうか言ったんで」

「そうか」

それっきり、恭也さんはだんまりしてしまった。

いつもの事なので俺は気にしてない。

恭也は基本物静かなタイプだからだ。

が、暫くだんまりした後、恭也さんが口を開いた。

「……なのはの事だが」

「……っ！？」

「その様子だと、知ってるみたいだな」

あくまでも疑問を問いただすと言うより、わかっている事実を確認するような口調で話しかけてくる。

「何をやっているかはわからない。ただ、何かをやっているだろう事はわかる。……あの日からな」

恭也さんが言ってるあの日とは、多分俺達がスクライアに出会った日の事だろう。

「それがおそらく危険な事だろうと言うこともわかる。ほんとは止めたいが……きっとなのははやめないだろう」

「……」

「君のおかげで、一人で抱え込むような事はしなくなったなのはが家族に相談しないってことは、俺達に出来ることは何もないんだろうな、情けないことに」

悔しそうに天井を見上げながら、恭也さんがそう呟く。

やがて、俺に向き直った恭也さんが言葉を続ける。

「……妹を、頼んだ」

その目は語っていた。

妹に何かあったら許さない、と。

だったら、俺はこう答えるしかないだろ？

「……はい、必ず」

「そうか」

それっきり、今度こそ会話はなかった。

『灯火』

『ん？』

風呂桶で掬った温泉のお湯に浸かっていたスクライアから念話がくる。

『僕もがんばるよ、だから……がんばろう？』

『……だな』

高町と、スクライアと、月村と、俺の皆で一緒に、な。

温泉旅行（後書き）

なんか、いつもと文章の雰囲気が違う気がしますが、温泉パワーと言うことで。

筆者は、温泉は静かに入るものと考えているので、あまり弾けた話にはしたくなかったんです。

気に入らなかったとしたら、申し訳ありません。

雷光、再び（前書き）

アルフさんの耳ってモフモフしてそうだなぁ

とか思う今日この頃。

雷光、再び

「ふぃー、いい湯だったー」
「うん、なんか家にあるお風呂ともまた違った感じがしたね」
「それが温泉ってもんだ」

あれか暫く温泉を楽しみ、今はあがって旅館を散策していた。
ちなみに、スクライアは相変わらず俺の肩に乗っていて、今は周りに誰もいないので普通にしゃべっている。

「そういや、桃子さんたちはあがってたけど、高町たちはあがってるのかねぇ？」
「なんなら、念話で呼んでみる？」
「いや、そんなことに念話つかうなよ」

ま、今すぐ合流しなきゃならん訳でもないし、こうやって散策しながら探しますか。

と思った矢先だった。

「……あれ？あそこにいるのって、なのはたちじゃない？」
「ん？ああ、確かに……って、なんか困ってるのか？」

スクライアが示した方を見ると、確かに高町たちはいた。
いたのだが……何やら困り顔。バニングスなんかめっちゃ不機嫌顔。
どうやら、あの髪がオレンジの女の人と一悶着あったらしい。

「んー、どうするか」

あまり騒ぎを大きくはしたくないんだよなぁ……

ふと、スクライアが件の女の人をじっと見ている事に気づいた。
その顔に下心はなく、何というか……険しい表情だ。

「……どうした？スクライア」
「……あの人、人間じゃない……？」

俺の問いに答えた訳じゃなかろうが、そんな言葉が帰ってくる。

いや、いくら子どもにからむ人でなしでも、それは失礼なのでは？

『主、そう言うことでは無いと思います』
「違うのか？じゃあどういう意味だよ」
「……気のせい、いや、でも……」

結局スクライアは一人でぶつぶつ呟いているだけで、その内女の人は笑いながら立ち去っていった。

「なんだってんだ？」

まぁ、今はそんなことより、お冠なバニングスの怒りをなんとか鎮めるとしますか。
ｓｉｄｅ　？？？

「はぁー、この温泉って奴は最高だねぇ。まったく、あの子も入ればいいのに」

私は旅館の廊下で件のちびっこに絡んだ後、温泉に入っていた。

この旅館に温泉に入りに来た訳じゃないけど、やっぱりさ、少しは楽しみたいじゃないか。

『アルフ』

『お、フェイトかい？そっちの様子はどう？』

そんなわけで温泉でまったりとしていると、私のご主人様であるフェイトから念話が届いた。

『詳しい位置はまだだけど、大まかな位置は分かった。今夜にでも封印する』

『あいよ。……でもさ、夜までまだ時間あるよ？フェイトも少しゆっくりしてもいいんじゃないかい？』

『私の事は気にしなくていいよ。アルフはゆっくりしてて』

『うー、分かったよ』

『ところで、あの子に会ったんだよね？どうだった？』

『……ああ、あのちびっこかい？ありゃフェイトの敵じゃないさ』

ざっと見た感じ、確かに魔力は多いけど、まだ魔法に慣れていないって感じたね。

フェイトには敵わないだろうさ。

『えっと、男の子はいたのかな？』

『男……はいなかったね、少なくとも、あの時はちびっこと一緒にはいなかった』

フェイトから話は聞いている。

なんとか勝てたけど、フェイトは追い詰められたって。

（もし出会ったら、私がフェイトを守らないと）

ひっそりと、そう決意した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔあの後、なんとか怒れるバニングスをなだめる事に成功した俺は、そのまま旅館の中を高町たちと散策したりして時間を潰した。

そして夕食を楽しんだ後、高町たちと談笑、後に解散し、寝るという運びになった。
なったんだが……

「……っ！？」

夜中、急に感じられる膨大な魔力と、以前感じたあの金髪少女の魔力、ついでに初めて感じる魔力。

隣で熟睡してる姉さんを起こさないように部屋から抜け出す。
隣の部屋からは高町が肩にスクライアを乗せて出てきた。

「スクライア、これって」
「間違いない、ジュエルシードだ！それとこの間の女の子も」

高町が出てきた部屋と反対の隣から、月村と忍さんも出てきた。

「なのはちゃん、灯火君、ユーノ君、なんかすごい何かを感じるんだけど、これってジュエルシード？」
「私はすずかが感じてる感覚は分からないけど、この前と同じ、すごく嫌な感じがするわ」

すずかはスクライアから魔力の運用法を習っているので、ジュエルシードの魔力を感じれるみたいだな。
忍さんは……魔力とはまた違った感覚を感じてるらしい。

「取り合えず、早くいこう！灯火君」

高町に急かされ、テンを起動させる。

「あ、私も……！」
「すずかちゃんはまだデバイスが出来てないからダメだよ！」

月村は行きたがっているが、こればかりは譲れない。
何より月村のためだからだ。
「すずか、そればかりは止めさせてもらうわよ？危険なところになんの備えもないのに行かせるわけにはいかないわ」

忍さんの言葉に、月村はしぶしぶ引き下がる。

「行くぜ！高町」
「うん！」

高町もレイジングハートを起動し、バリアジャケットを纏う。

「二人とも……頑張ってね！」

一緒に行けない悔しさを滲ませながらも、せめて応援だけでもと月村が声をかけてくる。

「ああ、行ってくる！」

そんな月村に答え、それから飛行魔法で魔力反応があった地点へと向かった。

反応があった地点に向かうと、そこにはあの金髪少女と……

「ありゃ？高町たちに絡んでた人じゃん」

そう、あのオレンジ色の髪をもった女の人がいた。

「もうジュエルシードは封印されてるみたいだ」

スクライアの言葉に、金髪少女を見ると、たしかにその少女の手のひらにはジュエルシードがふわふわと浮いている。

相手もこちらに気づいたのか、こちらを見てくる。

オレンジ髪の人に至っては睨み付けてくる始末だ。

「あなたたちは……」

「へぇ……ちゃんと警告したのに、しゃしゃり出てきた訳かい」

「警告？」

高町の方を見ると、「あれって警告と言うより脅迫だったのでは……」と呟いている。

一体何を言われたのやら。

「言ったよね？引っ込んでいい子にしてないと……ガブリと行くよってね！！」

そう言って女の人が動き出したと同時に、驚くべき現象が起こった。

なんと、女の人がオレンジの毛並みを持つ大きな狼になったのだ。

そして、女の人が姿を変えた狼は、そのまま高町に噛みつこうとし……

「高町が狂犬病になったらどないすんじゃぁぁぁぁ！！」

ガキィン！

すんでのところで俺が間に入り、アイゼンメテオール形態で防ぐ。

「スクライア！！」

「分かった！」

俺がやって欲しいと思った事を察したのか、いつもの通り、いつの間にか俺の近くにいたスクライアが、俺の呼び掛けに応じ、転送魔法を発動。

緑の光を放つ魔方陣が俺とスクライア、狼がいる地点に現れる。

「っ！しまった！転送魔法かい！？」

「高町！狼の相手は任せろ！……この前やられた借りをのしつきで返してやれ！！」

「あ……うん！！」

俺の言葉の意味を理解し、大きくは頷く高町。

その様子を見届け、俺達は転送魔法で別の地点へと跳んだ。

ｓｉｄｅ　なのは

「灯火君……ありがとう」

あの日以来、この金髪の子に対していろいろ考えていたのを察し、
舞台を整えてくれた灯火君に感謝する。

私は、あの子に向き直ると、レイジングハートを構える。

「一応ちゃんと話すのは初めてだから……はじめまして、かな？」

「……」

無言でデバイスを構えるあの子。

うーん、話す事は無いって事かな？だったら……

「頭を冷やしてもらってから、それからかな！！」

私たちは、互いのデバイスをぶつけ合った。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

雷光、再び（後書き）

残念ながら、すずかさんの本格参戦はまだ先のようです。

まだ暫くお待ちください。

目覚める音速（前書き）

みんなお待ちかね、あの形態が遂に解禁！

でも、本格的な活躍は次まで待っててください。

目覚める音速

夜中の森林で鉄がぶつかり合う音が響く。
その音を発しているのは、俺が振るうアイゼンメテオール形態のテンと、あの狼の爪や牙。

「うぉりゃぁぁぁ！！」
「～～っ！！なんつー力だよ、腕が痺れちまうな！？」

やはり獣だからだろうか？一撃一撃が重い。
下手すればこちらがパワー負けしかねない状況で、なんで俺が持ちこたえているかと言えば……

「チェーンバインド！！」
「ちぃ！さっきからチョロチョロと！！」

スクライアの存在が非常に大きい。

こちらの状態に合わせて適切な補助をしてくれるからこそ、俺はなんとかこの狼と渡り合っている。

今も、バインドは当たらなかったが、相手の注意を一瞬でもそらしてくれた。
その一瞬は非常に大きい。

「仕返しだ！」
「くぅぅ！！」

その隙に斬りかかる。
その際、かわされて軽い当たりになったが、エクスプロージョンに形態を変えていたので、爆発によるダメージを与える事は出来た。

二対一は卑怯と思われるだろうが、タイマンだったら俺の負けは見えてる。
高町みたいに一撃必殺級の魔法が無い俺では、獣のパワーとスタミナには敵いっこないって。

だったら、なんでエクスプロージョンのまま待ち構えないかって？

あの金髪少女みたいに、一撃の重みをある程度度外視して、速さで勝負するタイプならいざ知らず、この狼のみたいに、受けるたびに腕にジーンとくる攻撃を受けまくってたら、エクスプロージョンが発生させる爆発の衝撃と相まって、腕がすぐ使い物にならないくらい痺れちまうよ。
そうなったら正真正銘の詰みだしな。
距離をとって互いに睨みあう。

こちらは結構肩で息をしている状態だが、向こうは至って余裕綽々といった感じだ。

ふと、相手が視線を弛める。

「……二人がかりとは言え、案外やるじゃないか、たしかにあの子が追い詰められる訳だよ」
「そりゃどうも。と言っても、余裕ありげな様子のアンタに言われても、ただの皮肉に聞こえちまうよ」
「心外だね。こちとら本心だってのに」

口では残念だ、などと言っているが、ケラケラ笑っているあたり、たいして気にしないらしい。

「で？どう言うつもりだよ？急に話しかけてくるなんてさ」

「ん？ああ、アンタの連れは放っといていいのかねって思ってね」

連れ……高町の事か？

「私のご主人様は強いよ？アンタの連れ、魔力はでかいけど、素人だろう？勝てっこないだろうさ」

ああ、相手の狙いが分かった。

こちらの動揺を誘いたい訳だ。

……小賢しくて臍で茶を沸かしちまいそうだ。

「で？言いたいのはそれだけか？」

「は……？」

俺の反応に、相手も面食らったらしい。

「お前さんと同じさ。お前さんがご主人様を信じてるように、俺も高町を信じてる。驚く事は無かろうに」

「あ、あのさ、さっきの話を聞いてたのかい？」

「聞いてたが、何か？」

「だ、だったら……！」

クククッ、向こうが動揺してやんの。

ま、これだけは言っておこうかね？

「……アンタ、あまり高町嘗めんなよ？」

俺の言葉と同時に、俺の遥か後方から、桜色の光が天に向かって伸びていった。

「高町は確かに素人さ。けど、嘗めてると……痛い目見るぜ？」

ｓｉｄｅ　なのは

「シュート！！」

自分の周りに作り出した魔力スフィアから、三発の魔力弾を相手に向かって撃ち出す。

それぞれの弾が、直進したり、弧を描いて向かったりとランダムの動きをしながら、尚且つ金髪の子を追跡しながら向かっていく。

「……っ！？」

金髪の子はその速さで魔力弾をかわし、そのまま私の方へ向かってくる。

けど、そう来るのはわかってたよ。

「レイジングハートと灯火君の予想通り！！」

その言葉に反応するように、私の体の後ろに隠していた二つの魔力スフィアから魔力弾を撃ち出す。

「く……っ！」

この攻撃は予想出来なかったのか、何とかかわそうとしたものの、

一発は当たった。
これがあの日、この子相手に何も出来なかった私が、レイジングハートと灯火君とユーノ君と一緒に考えた戦い方。

私ではあの速さについていくなんて到底無理。だから灯火君がやったみたいに、待ち構えての反撃しかない。

けど、レイジングハートはエクスプロージョンみたいに、ただ待ってただけで攻撃、なんて事は出来ない。

ならばどうするか？
別な手段で代用しよう。
そう思って、産み出したのが、ディバインシューターによる待ち構えての戦い方。

現在、同時に扱える限界である五発のシューターを用いた反撃。

三発で相手を誘い込み、残りで反撃する。灯火君曰く、あの子は防御を犠牲にしてるから、魔力弾一発でも無視することは出来ないはずとの事。

だから相手は誘われてると分かっていても、誘いにのるしかなく、仮に魔力弾を迎撃しようとしても、その時は背後から残りのシューターが向かう。

灯火君相手に練習したさい、「なに？このえげつない攻撃？」と言われた戦法だ。

ちなみに、防御魔法で防がれた際は……

「ディバイーーーン……バスターーーーー！！」

このように、これまた新しく産み出した魔法、ディバインバスターで撃ち抜く。

灯火君は、「子どもの『魔法』に対する夢も撃ち抜くんですね？わかります」と真っ白になった顔でそう言ってた。

……灯火君は私をなんだと思っているんだろうか。

一度聞いてみた方がいいかもしれない。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「へくちっ」

こちとら真面目な雰囲気になってるってのに、なんでくしゃみなんか出るんだよ。

とまぁ、それはともかく、あの狼も天に伸びていく砲撃や、高町の戦い方をみたためか、唖然としている。

「な……なんなんだい、あれは……」

まぁ、相手の驚きももっともだろう。

ただ魔力がでかいだけの素人だと侮っていたら、その素人が自分のご主人と対等……下手したら圧倒してるんだからな。

「……毎日欠かさず行っているシュートコントロール」

「なんだって？」

俺の言葉に、狼は声をかけるが、それをスルーして言葉を続ける。

「常日頃からかけてる、並の魔導師じゃ立つことすら難しい魔力負荷と、その状態での俺との模擬戦。学校の授業中にマルチタスクを用いて行っている戦闘シミュレーション」

他にも基礎体力を高めるためのランニングやら何やら、その他諸々。ちなみに、高町だけじゃなく俺もやってたりする。

俺の言葉を聞くほど、狼の顔が真っ青になっていく。

「わかるか？あの日、俺達が負けた日からやってる訓練だ。……あの日から二週間近く欠かさなかった訓練だ」

「無茶苦茶だ……ふ、普通じゃないよ、それ……」

普通じゃない、ねぇ。

「『普通』じゃ、お前さんのご主人には勝てなかったからな。テンから手っ取り早く強くなるにはどうすりゃいいか聞いてやってみた」

ま、やり過ぎじゃないかっていう感じはなきにしもあらずだが。

どこからか、魔改造だ魔改造だという声が聞こえた気がした。

「ま、あくまでお前さんのご主人に勝つための訓練だったから、お前さん相手にゃ多少効果は薄いかねぇ」

……大分息も整った。

休憩はおしまいだな。

「続きをやろうぜ。こっちも譲れないんでね、アレに関しては」

そう言ってアイゼンメテオール形態のテンを突きつける。

「それに、こっちの準備も出来たみたいだし、なぁテン」

『相も変わらぬタイミングの良さ。自分を誉めちぎりたいですね』

俺の呼び掛けにテンが答え、同時に光を放つ。

足元に三角形の魔法陣が浮かび上がり、白っぽい灰色の光を放っていたそれが、鮮やかな水色の光を放つようになる。

そして、テンから放たれた光がおさまると、テンは姿を変えていた。

全体的な色は水色で、やや幅広で短めの刃をもった剣。

テン・コマンドメンツの力の一つ。

『テン・コマンドメンツ第三の姿、音速剣「シルファリオン」、いつでもアクセル全開で行けますよ！』

「なら、今から全開で行くぜ！」

言葉と同時に、俺は狼に斬りかかった。

「なっ！？今までより速い！？」

「そう言うこった！嘗めてると痛い目見るぜ！」

斬りかかった後、既に距離をある程度とった場所に移動した俺は、シルファリオン形態のテンを構えながらそう言いはなった。

目覚める音速（後書き）

灯火が途中言ってる訓練の一部は、コミック版A-sから持ってきました。
言ってないですが、もしかしたらなのははスターライトブレイカーの訓練もしてるかもしれません。

しかし二人とも、いくら負けたのが悔しいからって、その訓練を今やるなんて……

一先ずの決着（前書き）

……シルファリオンの活躍シーン、どこ行ったか知りませんか？

もし知っているなら、フォグナスまで。

一先ずの決着

「うぉおおおおおお！！」
「がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

テンの刃と相手の爪がぶつかり合う。

かれこれ何回ぶつかり合っただろうか？
数えることも億劫だ。

ガン、ガン、ガキィン！！

それでも、俺たちは互いの得物をぶつけ合う。

やがて、互いに距離をとる。

「はぁ、はぁ、ったく、いい加減負けてくれよってんだ！」
「はぁ、はぁ、そりゃ、私の台詞だっての！」

俺の不意をついての、いきなりの射撃魔法。
しかし、さっきまでと同じ様に、テンをシルファリオン形態にし、回避する。

ふと、背後から大きな音がしてきた。

「……向こうも決着がつきそうだな」
「はんっ！フェイトが負けるはずないさ！」
「どうだかな？それに、あらかじめ高町には負けるにしてもただじゃ負けんなって言ってある。そっちが勝とうが負けようが、痛手だ

ろうさ」

そう言いはなち、テンを構える。

「いい加減限界近いし、次で終いにしようぜ？そっちの方が簡単だしな」

「私の方は限界はまだ遠いけど、簡単に終わらせたいってのには同意だね。無駄は嫌いだよ」

向こうも体勢を変える。

「……」

「……」

特に合わせようとしたわけではないが、互いに同じタイミングで一歩を踏み出し、叫ぶ。

「「ぶっ飛ばす！！」」

俺はテンをエクスプロージョン形態に変え、向こうは狼の姿から人の姿に変わり、振りかぶった拳に魔力を集める。

やがて、刃と拳がぶつかり合うだろうという瞬間。

「ディバイーーーン、バスター！！」

「サンダー……レイジ！！」

高町達も互いの魔法をぶつけ合っていた。

そして、テンと拳がぶつかり合い、俺と相手を爆風が包み込んだ。

「……ってぇ……ファンタジーじゃなきゃ死んでたろ、今のは」
「灯火、なに変なこと言ってるのさ……」

木に背中を預けてぐったりとしているという体勢でそんなことを呟いたら、スクライアに突っ込まれた。
が、スクライアに悪いが、それはどうでもいい。
問題はなんで俺はこんな体勢になっているのかってのだな。

一応、テンと相手の拳がぶつかり合ったってのは覚えてる。
が、そこからどのような経緯を経てこのような体勢になったのかが分からない。

『主が自爆特攻を敢行したのですよ。まったく、我が主ながら無茶をしますね』
「あ？あー……そういやそうだったか」

テンの簡単な状況説明に、そういやそうだったかなーって感じに思い出す。

「で、思い出すついでに、あの狼姉ちゃんはどうなったんだ？」
「あそこでノビてるよ」

スクライアが前足を使って指し示した方向を見ると、確かにあの狼姉ちゃんがぐったりしていた。頭にでっかいたんこぶをのせた状態で。

頭にでっかいたんこぶをこさえているという光景を見てると、さっきまでのシリアスというかなんというかな雰囲気が一気に台無しな気がしなくはないが、まぁいいだろう。

「ま、今回は先に起きたから俺の勝ちっつー事で。んで、高町達はどうなったのやら」

先程高町達が魔法、と言うか魔砲を撃ち合っていた地点を見ても、特に音はしない。

気失ってるのかねぇ？向こうも。

そんな事を思ってると、草むらががさがさと音をたてる。

音がたったところを見ると、現れたのは……

「……どうだった？高町は」

「うん、すごく強かった。もしかしたら、負けてたのは私だったかも知れない」

ぐったりとした高町に肩を貸した金髪少女だった。

「う～、もうちょっとだったのに～！」

高町の方は、一応意識はあるみたいだが、動けないらしく、しかも身体中砂ぼこりかなんかで汚れている。

まぁ、埃だらけは金髪少女も俺も、もちろん狼姉ちゃんも同じだが。

「あなたは……アルフに勝ったんだ」

「アルフ……って、あの狼姉ちゃんか……まぁ、一応勝った扱いか？正直、痛み分けな感じがしなくもないが」

「そうなんだ……でも、それは私もかな」

そう言ってわずかに微笑む金髪少女。

おっ？

「へぇ、そんな感じに笑えるんだな」
「え？」
俺の言葉に、こてんと小首を傾げる。
……若干かわいいじゃないかと思ったのは内緒だ。
「お前さん、いっつもむすっとしてるから、あれがデフォかと思ったぜ。でも、笑った顔の方がいいじゃねぇか」
「そう……かな？」
俺の言葉に、戸惑ったかのような仕草を見せる金髪少女。
ま、いきなりんな事を言われても困るのは当たり前か。
「まぁ、その話は置いといて、真面目な話、こっちは一応俺の勝ちで、そっちはお前さんの勝ちだ。つまり一対一な訳だが……」
「……悪いけど、これは渡せない」
俺の言葉に、あのごっついデバイスを構えてそう宣言する。
……ちゃんと話は最後まで聞きなさいって親に習わなかったのだろうか？
「……普通ならここでお前さんとタイマンなんだが……そいつぁ無理だ。俺がもたん。つー訳で、そのジュエルシードは誠に遺憾ながら、お前さんのモンだ」
「……へ？」
「灯火！？何を言ってるのさ！？」
続けた俺の言葉に、金髪少女は唖然とし、スクライアは驚愕した。
でも、これって妥当な判断なんだが。

「いやさ、スクライアさんよ、今戦えとかそれなんて無理ゲーってレベルだぜ？こちとら立ってるのが精一杯、けど向こうは高町が軽いとは言え、人に肩を貸せる位には元気だ。勝ち目なんか分かりきってる」

そう言って俺は自分の足を指差す。

その足はよく見ると震えていた。

ぶっちゃけ、冗談抜きで立つのも辛い。

すぐさまその場にへたりこみそう。

「それとも、お前さん一人……一匹か、で戦ってみるか？」

「う……」

俺の言葉に、スクライアは口ごもる。

まあ、一人じゃ無理ってのは、他ならぬスクライア自身が分かってるだろうな。

俺だってこのまま渡したくはないさ。

でも、ここで無茶したとして、次の戦いに万全で臨めないってのは本末転倒だと思う。

「つー訳だ、そこでノビてる狼姉ちゃん……アルフだっけ？を連れて行きなよ」

「……分かった」

まだ俺を警戒してるみたいだが、やがて構えを解いてアルフの方へ向かう。

アルフは金髪少女に起こされて、何とか意識が戻ったようだ。

最初は俺を睨んでいたが、ジュエルシードは手に入れたと伝えられると、腰から出てる尻尾をブンブンと振り回して喜んでいた。

そして、飛行魔法を使って飛んでいこうとしたとき、何かに気が付いたような表情をして、金髪少女は俺の方を見た。

「……フェイト・テスタロッサ」

「はい？」

「私の名前、フェイト・テスタロッサって言うんだ……あなたは？」

「フェイト！？何自己紹介なんか……っ！？」

苦言を呈してくるアルフを宥め、俺の方を見る。

「……金木灯火、俺の名前だ」

「かなぎ……とーか？」

……なんだろう？微妙に発音と言うかが違う気がする。

一応、それを伝えようとしたんだが……

「……うん、それじゃあね、トーカ」

そう言ってアルフを伴い去ってしまった。

「……『とーか』じゃなくて、『とうか』なんだが……」

当然、そんな呟きは届くはずも無く。

その後、結局その場にへたりこんでしまい、動けなくなった俺は、月村に念話を使ってヘルプを要請し、なんとか旅館へと帰れた。

ちなみに、帰ったあと、月村にこんな無茶して云々と説教を受けたのは、話の大筋には関係ないか。

……ただでさえ限界突破してたのに、説教食らってる間正座してたから、足がもう……だめだぁ……

おまけ1　～食えない餅はたちが悪い～

なのはさん、灯火と共にすずかさんの説教を食らいながら思う。

「……むぅ」
『Ｍａｓｔｅｒ？』
「灯火君、フェイトちゃんとなんか仲良さそうに話してたの……」
『……』

流石のレイハさんも何も言えず。

おまけ2　～あの後のフェイトさん～

フェイトさん、アルフと入浴中に鏡を見ながら唸る。

「むぅ……」
「……フェイト～、さっきから鏡睨んでどうしたのさ～」
「ねぇ、アルフ」
「ん？」
「私って……笑ってた方がいい……のかな？」
「そりゃ、もちろんだよ。けど、どうしたんだい？いきなり」
「……むぅ」
「？変なフェイト。まぁいいや。ほら、頭流すから、目瞑ってー」

雷光がどうしてこうなったか、知るのは彼女らのアジト内では言わ

れた当人と戦斧のみ。
知らぬはアルフだけだったり。

一先ずの決着（後書き）

と言うわけで、さすがに今なのはに勝たせてもアレなんで、今回の勝者もフェイトさんに。

シルファリオンは……今回は活躍できなかった……

でも、必ず活躍させますので、お許しを。

最後、フェイトさんがなんか開眼しかけたり。

デバイス完成、その名は……（前書き）

いよいよすずかのデバイスが完成です。

皆さんの反応が怖いなぁ。

デバイス完成、その名は……

あの波乱の温泉旅行から、はや二週間位が経過していた。

あれ？疲れを癒すための温泉旅行だったはずなのに、むしろ旅行行く前よりボロボロになってた気がするんだが……

まぁ、それはどうでもいいか。

で、二週間位たった現在、俺と高町、スクライアは月村家の秘密ラボに来ていた。

月村を通じて忍さんに呼ばれたのだ。

呼び出された理由は聞いていないが、俺たちに伝言をしに来たときの、月村の妙な浮かれ具合（バニングスにめっちゃ怪しまれるくらいの）や、わざわざこの面子を集めたという時点で予想はついてるし、外れることはないだろう。

「……はぅ」

「月村さんや、ちょいと冷静になろう、な？」

「ふぁい！れれれ、冷静だよ！？」

冷静な要素がどこにも見当たらない件。

まぁ、無理も無かろうなぁ。

今まで何も出来なかった自分が、ようやく俺たちと一緒に戦う為のスタートラインに立てただから。

「でも、すずかちゃんのデバイスって、どんな感じかな？」

「えっと、お姉ちゃんもまだ教えてくれないんだ。『お披露目までおたのしみよ』って言って。ユーノ君は一緒に協力してたみたいだ

けど……」

「ごめん、忍さんに秘密にしててって言われてるんだ」

仕方ないよなぁ。

スクライア、負い目あるから忍さんに頭があがらんし。

「まぁ、あえて秘密にするって事は、サプライズさせたいんだろ？忍さんの事だし、トンでも機能は確実につけてあるだろうからな」

「「「あぁ、納得」」」

自分の姉だから、今までの付き合いから、そして短い間だが作成に協力したから。

理由はどうあれ、上記の理由たちにより、俺らの間で忍さんのイメージは固定化してる。

月村忍は頭にマッドがつく科学者である。

ラボの奥の部屋から、「ひっど～い！！」と言う声が聞こえた気がした。

月村のデバイスについての予想をああだこうだやっていると、ラボの奥にある扉から、布を被せられた何かを持ったノエルさんがやってきた。

……ノエルさんが？

「ノエル、お姉ちゃんは？」

まっさきに月村が疑問を口にする。

まぁ、無理もない。

部屋に入ったのは忍さんなのに、出てきたのはノエルさんなんだから。

「忍様は奥の部屋で……落ち込んでいます」

件のノエルさんは、持っている物を手近にあった机の上に置くと、そう言った。

けど、なんで落ち込んでんだろうか？

そんなことを思うと同時に、再び奥の扉が開き、そこから忍さんとファリンさんが出てくる。

……なんか、ファリンさんと忍さんが、「しっかりしてください！傷は浅いですよー！！」とか、「ふふ、妹にまであんな……もうダメポ」とか、「忍様ぁ！？え、衛生兵！衛生へーい！！」とかって寸劇を繰り広げてる。

……何があったし？

ノエルさんが言うには、さっきのアレ、忍さんはマッドがつく科学者だと言う発言が聞こえてたらしい。

で、それにショックを受け、なおかつ月村も同意していたと言うことでショックが倍プッシュ。

トドメにファリンさんの「あはは～、確かにその通りですねー」と言う無邪気故に残酷なお言葉であえなく撃墜。

普段はそんなことを言ったらファリンさんはお仕置きされそうなもんだが、妹にまでそう思われていたと言う事実は予想以上に堪えたようだ。

「えっと……すみませんでした」

もちろん、即土下座だった。

俺だけじゃなく、高町も月村も、あげくにはスクライアも。

ノエルさんが後に語ったところによると、それは見事な土下座だったそうな。

ちなみに、忍さんが機嫌を直すまで、しばらくかかったことを付け加えておく。

「……よーし！それじゃあ気をとりなおして、すずかのデバイスのお披露目よ！！……くすん」

まだ完全には立ち直れてないようだ。

小さくすすり泣きながら、忍さんは机の上に置かれた物にかかっている布を取り払った。

「……わぁ」

月村が感嘆の声をあげる。

現れたのは、黒い柄、黒い鍔、黒い刃。そしてそれを納めるであろう黒い鞘。

黒一色の日本刀だった。

「これが月村の科学を総動員して作った地球製デバイスの1号機よ。すずか、持ってみなさい」

「うん……」

忍さんの言葉に、恐る恐ると言った様子で手を近づけていく月村。

まるで、触れたら切り裂かれるのではないかと不安がっているようだ。

一度目を閉じ、深呼吸をする。そして目を開けた月村は、意を決してデバイスの柄を掴んだ。

『あなたが私の主ですか？』

瞬間、今まで黒一色であったデバイスの一部分が青く点滅しはじめる。

点滅しはじめた部分は柄頭の宝玉。

おそらく、そこがデバイスコアにあたるのだろうか？

そして同時に発せられる、レイジングハートやテンと違い、明らかに機械だと言わんばかりの女性の合成音声。

「ＡＩ付き……？」

「ふふん、月村の科学力をなめないでよね？……って言いたいんだけど、そのＡＩ、実は不完全なのよねぇ……」

「不完全？」

忍さんの言葉に、高町が小首を傾げる。

「普通のＡＩなら、それこそ普通の人並の対応がとれるＡＩが作れるんだけど……魔法に対応したＡＩってなり難しくて……今の地球の部品じゃ、メモリが足りなくて。ある機能がリソース食いすぎて、他の部分がどうにもねぇ、って感じなの。その証拠に声、かなりメカメカしいでしょ？」

そんなこととかをぼやく忍さん。

いや、魔法対応型ＡＩ作るだけで凄い気がする。「機能的には、術式構成の補助がメインね。もちろん、普通に刀としても使えるわよ。変形機構はレイジングハートやテンちゃんみたいなのじゃなくて、原始的なものね。すずか、スラッシュフォームって命令してみて」

「わかった……スラッシュフォーム」

『了解しました』

月村の命令に、刀の形だったデバイスが姿を変える。

刃が短くなったが、柄が短くなった以上に伸びる。

それは、一瞬槍のように見えたが、よく見ると、薙刀と言った方がいいだろう。

「変形機構が原始的って言ったのは、こんな風に伸び縮みするしか出来ないからよ。レイジングハートなんか、ヘッドの形完璧に変えちゃうけど、地球の技術じゃそれは無理だったから」

「いや、伸び縮みだけでも凄いのでは……」

高町の突っ込みももっともだ。

伸び縮みすると言っても、ラジオのアンテナとかみたいに、だんだん細くなるってことないし。

何て言うか、如意棒みたいに均一な太さに伸びてる。

「あれはね、言っちゃえば表に出てない、出せない技術を使ってるのよ。簡単に言えば、電気信号を与えて、形を変えるっていう特殊な合金をつかってるの。固さで言うなら、二人のデバイスに匹敵するから、耐久性も問題なしよ」

……ゾル・オリ○ルコニウム？

「さっき言ったある機能って言うのは、この金属を制御するプログラムと、術式構成の補助関係のプログラムよ。この二つがリソース食うわ食うわ」

その辺りはよく分からないが、とにかく凄いんだろうなぁ……

「そう言えばお姉ちゃん、この子の名前、なんて言うの？」

先程までデバイスを素振りしていた月村が、ふとそう言った。

「その子に名前はまだないわ。だから、あなたがつけてあげてちょうだい」

忍さんの言葉に、月村はしばらく悩んだあと、頷いて言った。

「決めた。この子の名前は『巴御前』。女の人だけど、戦を戦い抜いた、そんな人の名前」

巴御前。

平家物語では源義仲のそばで戦を戦い抜いた女性と言われている。

女の子である自分が戦いに赴く。

そう考えたら、確かにぴったりな名前だろう。

『巴御前……登録完了しました』

「よろしくね、巴御前」

こうして、月村は戦う力を手に入れたのだった。

デバイス完成、その名は……（後書き）

と言うわけで、デバイスの名前は巴御前となりました。もちろん愛称は巴で。

ある方に感想で名前について意見をもらったのですが、今回はこうなりました。
せっかくの意見でしたが、大変申し訳ありません。

ちなみに巴御前、史実かは分かりませんが、逃げ延びる際、襲ってきた敵の首をもいじゃうくらいの剛力だったそうな。
そこら辺も、すずかにぴったりかなぁと思いまして（怪力的な意味で）、この名前にしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4003w/

魔法少女リリカルなのは 十の剣を持つ者

2011年12月17日10時45分発行